

42334

教科書文庫

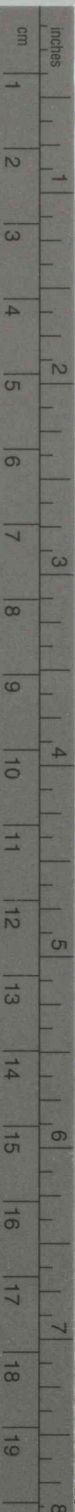
4
810
42-1936
2000.0 39769

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

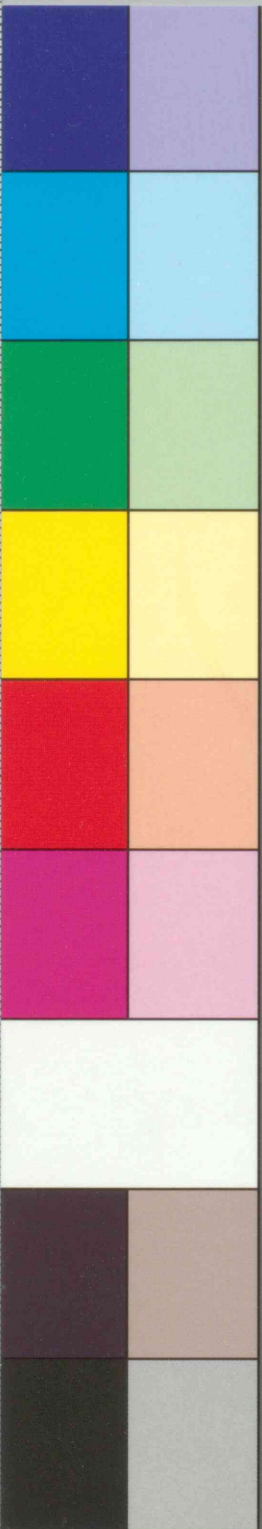
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Ta11
資料室

日本女子讀本

改訂 第二版 卷五



375-9
Tail

資料室

文部省檢定
高等女子學校國語科用
昭和十一年十二月二日

文學博士高木武編

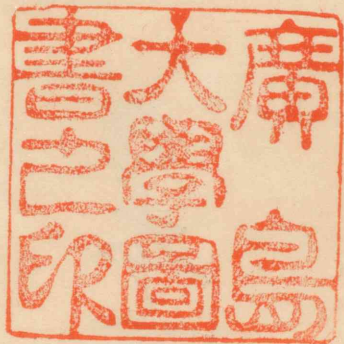
日本女子讀本

改訂
第二版

東京富山房藏版



花々もり 磯田文一郎筆



日本女子讀本 卷五

目次

- 一 櫻と日本
- 二 夜明の星(短歌)
- 三 初瀬夜參
- 四 神國の首都
- 五 楠氏三題
 - 一 櫻井の宿
 - 二 母の教訓

- 一
- 二
- 三
- 四
- 五
- 六
- 七
- 八
- 九
- 十
- 十一
- 十二
- 十三
- 十四
- 十五
- 十六
- 十七
- 十八
- 十九
- 二十
- 二十一
- 二十二
- 二十三
- 二十四
- 二十五
- 二十六
- 二十七
- 二十八
- 二十九
- 三十
- 三十一
- 三十二
- 三十三
- 三十四
- 三十五
- 三十六
- 三十七
- 三十八
- 三十九
- 四十
- 四十一
- 四十二
- 四十三
- 四十四
- 四十五
- 四十六
- 四十七
- 四十八
- 四十九
- 五十
- 五十一
- 五十二
- 五十三
- 五十四
- 五十五
- 五十六
- 五十七
- 五十八
- 五十九
- 六十
- 六十一
- 六十二
- 六十三
- 六十四
- 六十五
- 六十六
- 六十七
- 六十八
- 六十九
- 七十
- 七十一
- 七十二
- 七十三
- 七十四
- 七十五
- 七十六
- 七十七
- 七十八
- 七十九
- 八十
- 八十一
- 八十二
- 八十三
- 八十四
- 八十五
- 八十六
- 八十七
- 八十八
- 八十九
- 九十
- 九十一
- 九十二
- 九十三
- 九十四
- 九十五
- 九十六
- 九十七
- 九十八
- 九十九
- 一百

目次

一

三 如意輪堂

六 芳野懷古(漢詩)

(諸家) 元

七 ねむれる母(詩)

西條八十 四

八 近古短篇

四

一 松葉仙人

(十訓抄) 四

二 鳥羽僧正

(古今著聞集) 四

三 雀の報恩

(宇治拾遺物語) 四

九 思ひ出す樹木

新村 出 五

一〇 植林

窪田空穂 天

二 山科の大石内藏助

大佛次郎 六

三 人の脚

大町桂月 六

三 羊飼の大陸氣分

後藤朝太郎 全

四 小鳥水蟹

若山喜志子 全

五 蟹山伏(狂言)

(續狂言記) 全

六 はら一杯

101

一 狂歌

(諸家) 101

二 川柳

(柳樽) 103

七 草とり

徳富健次郎 104

八 塵の中

樋口一葉 109

九 天の音楽

小林一茶 116

一 天の音楽

116

二 をさな子

117

- 二〇 小さな出来事
- 二一 國學者の業績
- 二二 浮島が原
- 二三 敦盛最期
- 二四 車中の面識

- 吉村冬彦 二〇
- 岩城準太郎 二一
- (義經記) 二二
- (平家物語) 二三
- 杉村楚人冠 二四



日本女子讀本 卷五

一 櫻と日本

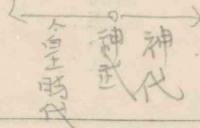
まだ肌寒い早春の雨
 日本そのものを象徴する
 天真爛漫
 張りきつた生命力のすばらしい跳躍

まだ肌寒い早春の雨がしと／＼と幾日も降り続いた後それが忘れたやうに晴れあがり薄霞が野山をこめると金色の日の光のまばゆく漂ふ中に、明るい櫻の春が来る。日本の春を象徴する、といふよりもむしろ日本そのものを象徴する櫻その花は三日を待たずして未練もなく散つてゆくが、花の王者としての美は、短い数日の間に、壓倒的に力強く發揮せられる。無数の花が枝といふ枝に満ちて一齊に簇り咲く爛漫たる美観は、まさに張りきつた生命力のすばらしい跳躍を想はせ、感激の極度に高調し

事物に感ずる心は起る

彩霞に包まれ
香雲に埋もれ
る

櫻ならでは見
ることの出来
ない



履中天皇
第十七代。

磐余

今の奈良縣磯
城郡安倍村池
之内の邊。

た瞬間を想はせる。

長堤十里、彩霞に包まれ、連山一帯、香雲に埋もれる壯觀、蒼林、綠野を背景として、一際鮮かに映發する清楚な麗容、おぼろ月夜に花神の化現をそゞろにしのばしめる妍姿、さては霏々たる飛雪の趣をさながら現出する落花の風情など、櫻ならでは見ることの出来ない自然美發現の極致である。

遠い神代の昔から、櫻の花が他の多くの花にまさつて我が國民に愛好せられてゐたことは、櫻を神格化した木花開耶姫といふ麗しい女神が、神話の中に見えてゐるのでも知られる。降つて履中天皇の御代には、皇居の名に櫻が採り用ひられるに至つたが、それには次のやうな一條の物語が傳へられてゐる。

それは天皇の三年冬十一月のことであつた。天皇は皇妃と共に磐余の市磯の池に舟を泛べて、一日の清遊を試みさせられたが、あたかも膳臣余磯の獻じた酒を酌ませられて、宴が酣になつた時、どこからともなく風に乗つてひら／＼と櫻の花が散りかかり、天皇の御手に遊ばされた御盞に入つた。並び立つ大和の青垣山も、どんよりとした寒空の下に、艶を消して見える冬の最中に、目の覚めるやうな薄紅の花びらが、御盞の中に浮んだのである。天皇のお驚きになつたのは申すまでもない。早速、長眞膽連を召され、今、時ならぬ花が散つて來た。これはいづこの花であるか尋ねて參れ、と仰せられた。長眞膽連は仰せ畏んで、たゞ獨り花を尋ねて山をさまよひ、遂に掖上室山まで來て、やつと咲き誇つた櫻を見出し、これを天皇に奉つた。天皇はその稀有な現象であるのを大層悦ばれ、宮名を磐余の稚櫻宮とおつけになり、長眞膽連には稚櫻部造といふ姓を賜ひ、また酒を獻上した膳臣余磯には稚櫻部臣の名を賜はつたといふ。これが實に「さくら」の名の文獻

並び立つ大和
の青垣山

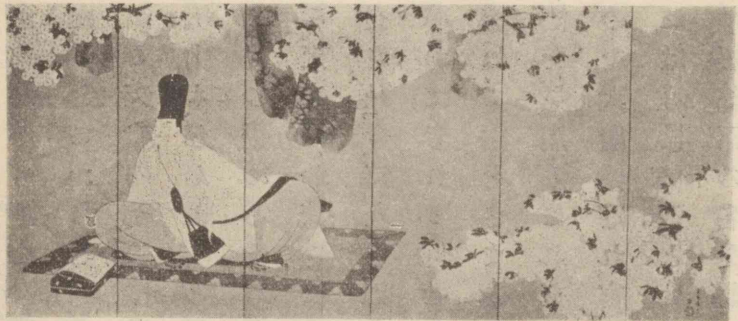
仰せ畏んで

掖上室山

今、奈良縣南
葛城郡掖上村
にある。

文獻に現れた
最初

仁明天皇
第五十四代。



櫻町中納言

に現れた最初である。
爾來年を経るにつれて、櫻を愛好する傾向は、上下貴賤を問はず次第に熱烈さを加へ、仁明天皇の御代には紫宸殿前に左近の櫻が植ゑられ、天皇も常にこの木に向はせ給ふこととなつた。また花の名所も年々に數を増し、花見は一年の行事の中でも最も大きな歡樂となつた。都の姉小路室町にあつた自邸を中心として、東西の町へ櫻を無數に植ゑ並べて、時人から櫻町中納言の名を負はされた藤原成範が、その花の日ならずして散つてしまふのを惜しんで、天照大神に祈願をこ

藤原成範
平安時代末期の朝臣、通憲(信西)の子、文治三年歿、年五十三。

好箇の例證

枚擧に遑なく

密接な契合
精粹を聚めて



(西堀刀水筆)

め、二十日の齡を保たせることを得たといふ話の如きは、いかに我が國民が櫻を熱愛したかを示す好箇の例證であらう。隨つて、或はその特色を敘し、或はその趣を稱し、或はその徳をたゞへた詩歌、文章は枚擧に遑なく、いづれにも國民的好尚、日本的趣味がよく發露してゐるが、かくまでに我が國に於て櫻が愛好せられたのは、我が國民性と櫻の屬性との間に極めて密接な契合があるからである。春酣な頃、宇宙の精粹を聚めて咲き誇る櫻は、飽くまでも華麗で、陽氣な風趣をもつて満たされてゐるが、これは我が國

絶倫の美相を發揮する

民の快濶樂天的で、明朗な氣質と、まさに符合する。一輪の花の上に於てよりは、自然の梢の上に密集して集團的に簇り咲くところに絶倫の美相を發揮する櫻は、我が國民が、皇室を中心として、綜合的家族制度をもつて國家を組織し、個人としてよりもむしろ國民として、團體的に最もよく特性を發揮してゐるのと趣を同じくしてゐる。

一木全體の櫻の花が、咲くのも散るのも一齊同時に行はれ、しかも、その咲いてゐる間が僅か數日にして、盛りのままの姿で、ぱつと散つてしまふ態度は、いかにも潔く、華やかで、聊かの未練もない。これは、我が國民の何事にも協同一致の態度をとり、思ひきりがよくて、潔いのと、よく吻合してゐる。

櫻の花の咲き揃つた姿の、鮮かに華やかではあるが、清楚皎潔にして、優美な風趣と高雅な氣品とを具へてゐるのは、我が國民

己の報

オレ

ツキ

下左にツキ

己

スア

オレ

己

己

狩り暮す

の溫和寛仁にして清淨を好み、瀟洒にして氣節を尙ぶ風の厚いのと似通つてゐる。

このやうに、櫻はまさしく我が國民性を象徴してをり、我が國民性は櫻の本質をさながらに發動せしめてゐるから、櫻を觀賞するに當つても、我が國民は單獨に一人で見ても、楽しむやうなことはせず、或は一家舉つてこれに赴き、花の下蔭に於て、團樂の楽しい時を過し、或は親しい友人知己を誘ひ合はせて、團體的に花見の宴を張り、或は都鄙老若男女貴賤の區別なく、あらゆる人々が總動員して、我を忘れて花を尋ね、花に酔ひつゝ、狩り暮すなどが、櫻をめぐつてあらはれる事柄は、何から何まで協同的國民的である。我等は、我が國家や國民性の理想的な表現を櫻に於て認め、花の王者としての櫻の眞實な相と價値とを、我が國家國民性の契合に於て認めるのである。

〔採轉載〕

與謝野晶子
堺市の人、明
治十一年生。

本栖村清水に
かへてみづう
みを汲むとい
ふなり三十戸
ほど 晶子

本栖村
富士山の西北
麓にある本栖
湖の東岸。山
梨縣西八代郡
上九一色村の
字。

茅野雅子
大阪市の人、
明治十三年生。

二 夜明の星

山寺の一重のさくら散るに似てさびし夜明の星消ゆ
る空

與謝野晶子



銀杏の葉黄にして立つにふためきて野の霧くだる秋
の夕暮

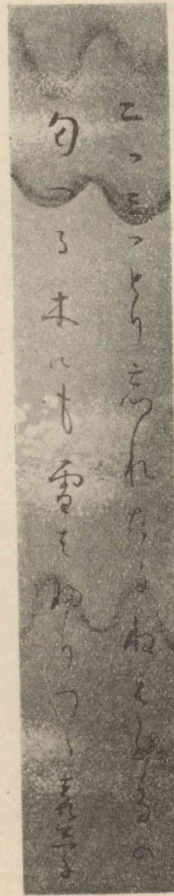
茅野雅子

さゝやかなる家居ながらに親と子がすめる向ふの山

に鳥なく

子供等のもたんとすれど生ける魚の勢つよし尾にて
地をうつ

若山喜志子



あはれにも美しきものの終りかな散るはなびらにま
じれる花粉

春をいそぐ葱や青菜の莖だちを惜しみつゝきざむ夕
の厨に

若山喜志子
長野縣の人、
明治二十一年
生。

二つ三つとり
忘れたるねえ
ぶるの匂へる
木にも雪はふ
りつゝ 喜志子

今井邦子
名はくにえ、
長野縣の人、
明治二十三年
生。

めづらしみ山の花取りに子が行きし山をかくして夕
立きたる

今井邦子

わが宿の二つ白菊玉に咲くうるはしき秋もやゝすぎ
にけり

岡本かの子

わがこゝろむなしき時し白梅のかそけく散るを眼に
見つるかも

岡本かの子
東京市の人、
明治二十六年
生。

ひむかしにあ
らはれいてし
望の月ゆふ空
なから明けく
見ゆ 邦子

四賀光子
本姓は太田、
長野縣の人、
明治十八年生。

剪りたての花のつめたき重みをば食後のたゆき手に
うけにけり

四賀光子

朝空にもすの
鳴く音のさえ
入るや山の根
きはの塔を見
えくる 光子

しろくと蓼の茂りに風吹けば秋はまちかき戰場が
原

杉浦翠子

庭を打つさみだれ聴けば長雨に入る音としもとゝの

戰場が原
栃木縣の中禪
寺湖の北方に
ある高原。
杉浦翠子
川越市の人、
明治二十四年
生。

ふ雨音

離れてはまたとまりたる赤とんぼの影さだまりぬ草
の葉の上

三 初瀬夜參

荻原井泉水

宿を出ると、初瀬の夜の町は暗い。そこら三四の旅館はまだ店
をあけてはゐるのだが、先程私と同じ汽車で着いた團體の客と
旅館の提燈とが入り亂れた時の混雜と較べられるためか、いは
ば燈が消えたやうで、宵のうちなのに行く人も稀だ。砂利の敷い
である道が爪先上りになつて行く。道に沿うて走る小川の音が
する。さすがに春の夜とて風は生温かい。月はまだのぼらないら
しい。

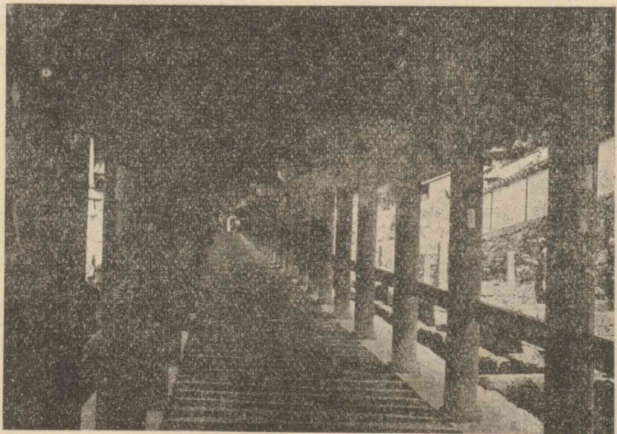
荻原井泉水
名は藤吉、俳
人、東京市の
人、明治十七
年生。
初瀬
奈良縣初瀬町。

長谷寺
新義眞言宗豊
山派の本山、
養老五年、僧
道明の創建。

ずつと

光をたどつて
踏んで行く心
持

今までまつすぐに來た道が左に折れると、やがて長谷寺の第
一の樓門ロウモンが立つてゐる。その前に
大きな松が一株あり、橢圓の池に
は清水が溜つてゐる。そこから廻
廊がずつと上に續いて、石を敷い
てある。その石段は極めて緩やか
で、十五六歩を行くごとに、結晶形
をした銅の燈籠がさがつて、そこ
から次の燈籠までの間が、ほのか
に明るく、その燈の遠さ近さで、足
もとに光の弱さ強さのあるのも
おつとりと柔かく、自分の踏んで
行く石道の外は一面の暗い闇で、つまり光をたどつて踏んで行



長谷寺の廻廊

く心持も、何となく尊いものの感じがするのである。
その廻廊は右に左に、繪に描いた稻妻の形に折れまがりつゝ、
その折れまがりの一ところに電燈がついて、ほのくくと白く咲
いてゐる花がある。櫻かと思つて立寄つて見ると梅で、傍に札が
立つてゐる。

貫之

紀氏、平安時
代初期の歌人、
天慶九年歿、
年六十五。
人はいさ云々
「古今集」卷一
に見える。

貫之の梅
人はいさ心もしらざるさは花ぞ昔の香ににほひける

なほ廻廊を傳うて行くと、第二の樓門があつて、そこから長谷
寺の本堂である。私は佛前に近づいた。本尊十一面觀世音の大像
は楠の巨木をもつて刻んだもので、高さ二丈六尺餘といふこと
である。左右に半ば開いた御帷の前に置かれた燈明臺の明りが、
菩薩の金色の御頤をすつと照らしてゐる。御胸のあたりはほの

美しくも
いしくも

暗く、左の御手に寶瓶を持つてをられるといふことだが、それも
はつきりとせず、燈明に近い御裙はぱつと輝き、松に南天の供華
もくつきりと見え、そしてその前の莊嚴道具と赤い厚い座蒲團
とが、柔かな光の中に落着いてゐる。

私は久しく合掌してゐた。
再び眼を舉げると、佛前の御額には世自在といふ大字がいし
くも書いてある。

本堂は戸や葦の類を備へず、すべて明け放して、太い櫓の丸柱
十數本を立てたのみで、中はからりとしてゐる間に、一段と高く
疊を敷いた所が三十疊敷ほどあらうかと、ここは檐に釣つた
燈をもつてほんのりとうかゞはれる。黒い、しつとりとした、生温
かい夜風が通つてゐる。

初瀬

芭蕉
松尾氏、名は宗房、江戸時代初期の俳人、元禄七年歿、年五十一。

(春の夜やこもり人ゆかし堂の隅)

芭蕉

安穩さに浸つてゐる

清少納言
平安時代後期の才媛。清原元輔の女。第六十六代一條天皇の皇后定子に仕へた。歿年不詳。
枕草子
清少納言の隨筆。

芭蕉がここに詣でたのは、かうした春の夜であつた。その時、この疊敷の上に、おこもりの人が坐つてゐたものと見える。暗い燈の下に、しかしほつと影をひくほどの光は届いてゐる所で、その人は木像のやうに落着いて、わづかに數珠を爪繰る指先が動き、低く唱名の聲をたててゐたものであらう。堂の隅に座を占めたその様子がつゝましく、佛の膝に近くゐる安穩さに浸つてゐるらしいその人の心にも、芭蕉は觸れ得たやうに思つたればこそ、「ゆかし」とはいつたものであらう。春の夜や」と詠ひ起したその春の夜風が、そよ／＼と花の香を含んで堂の内に漂うてゐる趣も、その景情と調和してゐる。そのこもり人は、恐らく法體ではあるまい。或は女人であつたかも知れない。清少納言の「枕草子」を見ても、平安朝には禁裏から女房たちが初瀬詣といつておこもりに

來たものであるし、江戸時代にもこの寺には女人の參拜する者が多くはなかつたかとも思はれる。

私は舞臺へ出て見た。

月は今、ゆんらりと山の上に現れたところである。圓くはあるが、おぼろであつて、大きな暈をもつてゐる。舞臺正面の少し左に寄つた山の上に、

その山は、御堂のある所を胸とすると、肘を張つて裕かに袖を合はせたやうな形に左右から差出でて、その間の谷に深く初瀬の町を包んだやうな形である。こもり人の初瀬の里と古くから歌枕の言葉になつてゐるが、まことに「こもり」といふ感じはよく適してゐる。しかしその袖になつてゐる山の二つは、可なり隔つてゐるらしく、遠い方の山は月光を受けて、ほんのりと淡い色に染められてゐるが、近い方の山は月光に背いて、こんもりと濃

濃い色に沈んでゐる

初瀬川
末は大和川に
入り、大阪灣
に注ぐ。



本堂を振返つた。南北十五間といふその堂は、がつしりと大きく、

い色に沈んでゐる。その山と御堂のある山との間の谷にも、まだ月の光はさして來ず、その闇の底に、ちか／＼と家の燈がかたまつて、その町の形に長く伸びてゐる。廻廊の燈は屋根のために蔽はれて見え、少し離れて點在してゐる。谷星のやうなものは、諸堂の燈なのであらう。耳を澄ますと、水の音がさ／＼と聞える。それはこの山の懐から湧き出て、町に落ちて、初瀬川となるその水の音であらう。

私は舞臺の勾欄に背をもたせて、

細かく浮彫に
なし
その邊に澱んで
ゐる單調な
暗さ

なだらかな山
の曲線

暗いが、舞臺に面した檐先に三つの電燈が釣つてある。その中央の一つは、龕燈形をして、その強い光が上に洩れては、垂木の一つ一つを細かく浮彫になし、下に流れては、舞臺の上まで溢れてゐる。他の二つは左右の端に近くあつて、その邊に澱んでゐる。單調な暗さに美しい隈どりを與へてゐる。御堂の屋根は三角形に鋭くそぎ立つて、まろ月がだん／＼高くなると共に、薄明るく青みかけて來る空に、かつきりとはめこまれてゐる。その屋根を中心にして見ると、その斜線が平に流れては、桁行となり、前方に差出ては舞臺となり、電のやうに走つては廻廊となつてゐる。この直線の美しさを包んで、なだらかな山の曲線が巴の形に重なりあつてゐる。その上に大きな月の暈のまた美しい曲線が――。

私はまた可なり高くなつた月を見た。この場面を一つの劇の舞臺装置とすると、――月は照明であつた。しかも、そのおぼ

いみじくも巧に試みられた恍惚とした心持に誘はれた

ろおぼろとした光は、この情景に、いみじくも巧に試みられた照明であつた。私はいづくからともなく音楽が起り、花が降つて、観音の化身である美しい姿が舞ひ出て來さうな或恍惚とした心持に誘はれたのである。

(観音巡禮)

小泉八雲
もとラフカヂ
オッヘルンと

四 神國の首都

小泉 八雲

いひ、英國の作家であつたが、後我が國に歸化し、明治三十七年、明治三十五年、日常生活に伴なふあらゆる音響

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底で緩やかな大きな脈が搏つやうに響いて來る米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れて來るのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、私には最もあはれに思はれる。米搗の音は、日本といふ國土の脈搏である。それから禪刹洞光寺の大きな鐘が、ごうんと響きわたつて、市の上空を、撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、太

春の若葉の軟かな緑の雲越しに

大橋川

宍道湖の水が、その東方にある中の海に落ちて行く水路で、松江市を貫流してゐる。宍道湖、松江市の西方にある。

閉ぢ。

鼓の淋しげな音が晨の勤行を告げる。最後には、早く出かけた行商人の物賣の聲、大根やい、蕪菁や、蕪菁。薪や薪。明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開け、河畔の庭から、伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに、朝景色を眺めやる。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わな、くやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は宍道湖に向つて口を開け、湖は右手へ擴つて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は、戸が皆しまつてゐるので、あたかも箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見わたすと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲



小泉八雲

閉ぢ。その東方にある中の海に落ちて行く水路で、松江市を貫流してゐる。宍道湖、松江市の西方にある。

奇を衒つた

狀をなした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りである。實際の現象を眺めたことがなくて、繪を見る者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山の裾をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知れぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。だから、湖水は實際よりも遙かに大きく、味爽の空の色と入り交つた美しい幻の海となつて見える。山々の嶺は、霧の中に浮ぶ島嶼となり、夢のやうな一帯の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立ちあがるにつれて、その趣は徐に變つてゆく。朝日の



江 松

味爽の空の色

霞にぼやけた船の精靈

黄色な縁が見えて來ると、今までのよりは更に強く、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにあるペンキを塗らぬ高い建物は、その木地の色が、美しい霞の色のために、蒸氣の立つ黄金色へと變る。朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋のかなたに、一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。私はこんな奇異な恰好の美しい船を見た例がない。まさにこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかしこの精靈は、雲と同様に光線を受けてゐるので、薄青い光の中で金色に震へてゐる。庭先の川端から、手を拍つ音が起つて來る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。銘々帯に小さな青い手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必

新月の如く彎曲した小舟

杵築の神社
島根縣大社町にある官幣大社出雲大社
一畑山
宍道湖の西北岸に聳え、山中に臨濟宗一畑寺がある。

ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響のやうに出て来る。遠くにある、軽い優美な、そして新月の如く彎曲した小船からも出て来る。この頗る異様な恰好の船の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。もはや拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆、朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。いと尊き日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ次々に向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師



繪の魏古のヤシリギ

如來の大伽藍のある所に向ひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌を合はせて軽く擦る者もある。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒もまた神道信者であるから、誰も古風な神道の祈る文句を唱へる。祓ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始まりだし、橋の上から、からころといふ下駄の音が、だん／＼高く響いて来る。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音楽的で、盛んな舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日のさした橋の上を通る數へきれぬ人の足がちら／＼するのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好

均齊を得てゐる

が均齊を得てゐて、ギリシヤの古甕に描いた人物の足のやうに
輕やかで、そして足を運ぶ時、指を先におろす。實際、下駄では外に
しやうがない。それは踵は下駄にも着かねば、地にも着かない。足
は楔形の木の臺を前へ傾けては進むのだから。單に一足の下駄
の上に立つだけでも、慣れぬ者にとつては困難であるのに、日本
の子供は三寸もある臺の下駄をはいて、拇指と他の四本の指と
の間に挟んだ前緒だけで足に固定させて、全速力を出して駆け
て行く。それでも躓きもせず、また下駄もぬげない。

更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺
に高さ五寸もある齒が附いてゐて、その全體の構造は、木製長椅
子の漆塗の標本かと思はれるほどである。しかしそれをはいた
人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに實に樂々と濶歩
する。

濶歩する

埠頭の側で眠
つてゐた小蒸
氣船

やがて學校へ急ぐ子供たちが出て来る。彼等の駆ける時、綺麗
な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽ばたきをす
るやうに見える。
親船は白色や黄色の大きな翼をひろげるし、埠頭の側で眠つ
てゐた小蒸氣船は煙突から煙を吐きはじめる。

(知られぬ日本の面影)

五 楠氏三題

櫻井の宿

今の大阪府三
島郡島本村の

字

直義

足利尊氏の弟

主上

後醍醐天皇

櫻井の宿
公卿 一 大納言 櫻井の宿
→ 攝津 考 櫻井の宿
→ 大納言 櫻井の宿
→ 大納言 櫻井の宿

尊氏卿直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ
戦はんために、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣、早馬をまゐらせて
内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ぎあつて、楠木判官正成
を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合はせて合戦を致

の部を
上をガミ
をスケ
判官
正成

機に乗つたる
大勢

建武三城

前の如く云々
延元元年正月、
尊氏入京の際
に後醍醐天皇
が山門へ臨幸
になつたこと
を指す。

山門
比叡山延暦寺。
河内
大阪府。
河尻
淀川の河口。

むげに
思はんずる
とてもかくて

すべし。と仰せられければ、正成畏まつて申しけるは、尊氏卿既に
筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くに
ぞ候らん。御方の疲れたる小勢をもつて、敵の機に乗つたる大勢
にかけあつて、尋常の如くに合戦を致し候はば、御方決定うち負
け候ひぬと覺え候なれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候うて、前
の如く山門へ臨幸成り候べし。正成も河内に罷り下り候うて、畿
内の勢をもつて河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつ
からし候ほどならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々に
隨つて馳せ集まり候べし。その時に當つて、新田殿は山門より押
寄せられ、正成は搦手にて攻め上り候はば、朝敵を一戦に滅ぼす
ことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候とも、路次にて
一軍もせざらんは、むげにいひがひなく人の思はんずるところ
を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戦はとてもかくても

始終の勝

清忠
藤原氏。

道
道を失ふところ
よも過ぎじ

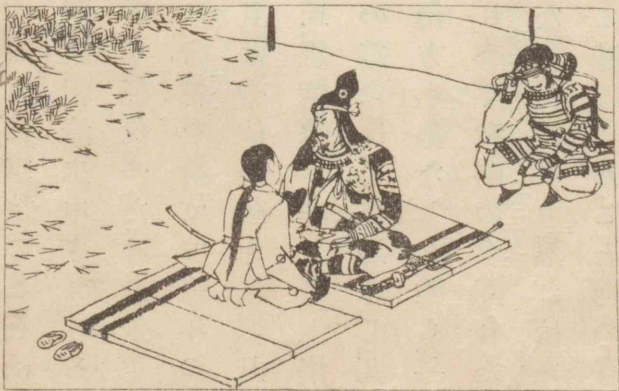
聖運の天にか
なへる故
何の仔細かあ
るべきなれば

始終の勝こそ肝要にて候へ。よく遠慮をめぐらされて、公議
を定めらるべきにて候。と申しければ、まことに軍旅のことは兵
に譲られよ。と諸卿僉議ありけるに、坊門宰相清忠申されけるは、
「正成が申すところもその謂れありと雖も、征伐のために差下さ
れたる節度使、いまだ戦をなさざる前に、帝都を捨てて、一年のう
ちに二度まで山門へ臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、且は
官軍の道を失ふところなり。たとひ尊氏、筑紫勢を率して上洛す
とも、去年東八箇國を從へて上りし時の勢には、よも過ぎじ。凡そ
戦の初より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりと雖も、毎度
大敵を攻め靡けずといふことをなし。これ全く武略のすぐれたる
ところにはあらず、たゞ聖運の天にかなへる故なり。然れば、たゞ
戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅ぼさんこと、何の仔細
かあるべきなれば、たゞ時を替へず、楠木罷り下るべし。」とぞ仰せ

五月十六日
延元元年。

出されける。正成、この上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

正成これを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を残しけるは、獅子子を産んで三日を経る時、數千丈の石壁よりこれを擲ぐ。その子獅子の機分あれば、教へざるに中よりはね返りて死することを得ずといへり。況や汝既に十歳に餘りぬ。一言耳にとまらば、我が教誡に違ふことなかれ。



(筆寄雪村小) 宿の井櫻

將軍
足利尊氏。

養由
支那周代の弓
術家。

紀信
漢の高祖の臣
高祖の身代り
となつて戦死
した。

これぞ……な
らんずる

さこそ見たく
思ふらめ

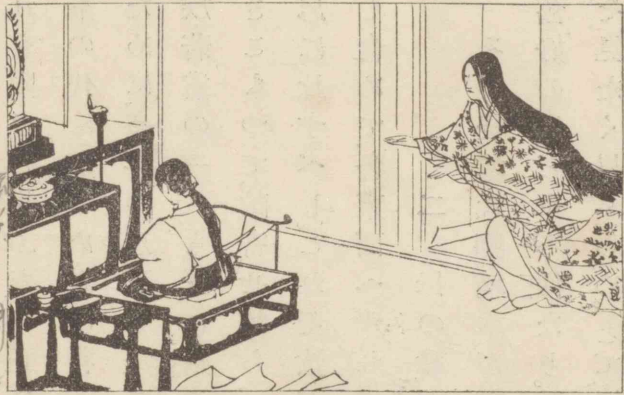
今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、これを限りと思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死に残つてあらんほどは、金剛山のほとりに引きこもつて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。と泣くく申し含めて、各東西へ別れにけり。

二 母の教訓

その後、尊氏卿、楠木が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好のほど、不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。とて、遺跡へ送られける情のほどこそ有難けれ。楠木が後室子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、さ

思ひまうけ

せきあへず
帶刀
正行。



母の教訓 (小村雪舟筆)

まさま申しおきしことども多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて、正行をとゞめおきしかば、出でしを限りの別れなりとは、かねてより思ひまうけたることなれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、かはりはてたる首を見るに、悲しみの心胸に満ちて、歎きの涙に、せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも、似ぬ有様母が歎きのせん方もなげなるさまを見て、流るゝ涙を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行き、父が兵庫へ向ふ時、形

死に残りたらん一族

見にとゞめし菊水の刀を右の手に抜き持ちて、袴の腰を押下げて、自害をせんとぞしゐたりける。母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取りついて、涙を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳し。といへり。汝幼くとも父が子ならば、これほどの理に迷ふべしや。小心にもよく、事のさまを思つてみよかし。故判官が兵庫へ向はれし時、汝を櫻井の宿より返しとゞめしことは、全く跡を弔はれんためにあらず、腹を切れとて残しおきしにもあらず。我たとひ運命盡きて戦場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に残りたらん一族、若黨どもをも扶持しおき、今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君の御心を安んじまらせよ。といひおきしところなり。その遺言具さに聞きて、我にも語りし者が、いつのほどに忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひまゐらせんことあるべしとも覺えず。と泣くゝ諫めとゞめて、

淀

今の京都府淀町。

八幡

今の同府八幡町。

先朝

後醍醐天皇。

危きを見て命を致す

攝州

攝津國。

湊川

今、神戸市内にある。

候ひ了んぬ

我と手を碎き

いひがひなき
謗に落つ

大將にて、四國中國東山東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。京勢雲霞の如く淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行舍弟正時一族うちつれて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資をもつて申しけるは、父正成^{シカキ}厄弱^{ヤクジャク}の身をもつて大敵の威を碎き、先朝の宸襟^{シキキ}を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷りなり候ひしを、合戦の場へは伴なはで、河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持^{フシ}し、朝敵を滅ぼし、君の御心を安んじまゐらせよ。と申しおきて死して候。然るに正行正時既に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦仕り候はずは、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略^{ブリョク}のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待^{ウタイ}の身思ふにまかせぬ習

身命を盡し

戦の雌雄を決す

主上

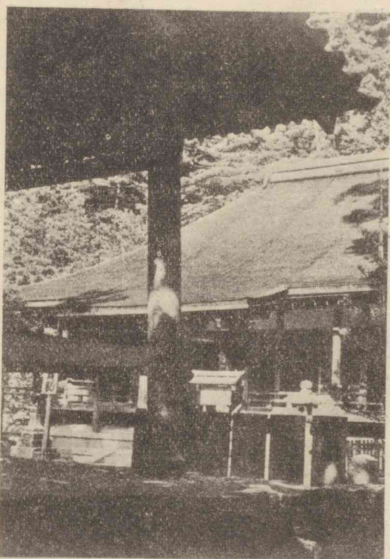
後村上天皇。

返すくも

進退度に當り
變化機に應ず

にて、病に犯され早世仕ること候ひなば、たゞ君の御ためには不忠の身となり、父のためには不孝の子となるべきにて候間、今度師直師泰にかけあひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らんために、參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心^{ヨシココロ}の氣色に顯れければ、傳奏^{デンソウ}いまだ奏せざるさきに、まづ直衣の袖をぞ濡されける。
主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨あり、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とす

如意輪堂
吉野山にある
淨土宗の寺。
創建年代不明。



如意輪堂

るところなれば、今度の合戦手を下すべきにあらざと雖も、進むべきを知つて進むは時を失はざらんがためなり。退くべきを見て退くは後を全うせんがためなり。朕、汝をもつて股肱とす。慎みて命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の参内なりと思ひ定めて退出す。

正行正時和田新發意舎弟新兵衛以下、今度の軍に一足もひかざ、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過

梁川星巖
名は孟緯、江戸時代末期の漢詩人、美濃の人、安政五年歿、年七十。

石馬
社の前の狛犬などをいふ。

杯土
陵墓のこと。ここは後醍醐天皇の御陵。

去帳に書き連ねて、その奥に、かへらじとかねて思へば梓弓なき數に在る名をぞとむる。

と一首の歌を書きとゞめ、逆修のためと思しくて、各鬢髪を切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野をうち出でて敵陣へとぞ向ひける。

(太平記)

六 芳野懷古

今來古往事茫茫。
石馬聲無く杯土荒。
春は櫻花に入りて満山白く。
南朝の天子御魂香し。
後醍醐天子御魂香し。

梁川星巖

藤井竹外

名は啓、江戸時代末期の漢學者、攝津の人、慶應二年

天颯

天から吹いて來るはげしい風。

眉雪

眉毛の雪のやうに白いこと。

河野鐵兜

名は龍、江戸時代末期の漢學者、播磨の人、慶應三年

西條八十

詩人、東京市の人、明治二十五年生。

後見
天より吹きまわ大きくおどかす風。

古陵の松柏天颯に吼ゆ。
山寺春を尋ねれば春寂寥。

眉雪の老僧時に帯ふを輟め。
落花深き處南朝を説く。

山禽叫び断えて夜寥々。
限り無きの春風恨未だ銷えず。

露臥す延元陵下の月。
満身の花影南朝を夢む。

七 ねむれる母

母びとの

藤井竹外

河野鐵兜

西條八十

午睡さみしや、

庭にさく

あぢさゐの花。

安らけく

ほゝゑみたまふ

口もとの

小さきほくろ。

(はらからを)

あまた育てて

わが母も

老いたまひけり。

うちながめ

かなしたふとし、

天地あめつちに

一人なるひと。

(西條八十詩集)

八 近古短篇

一 松葉仙人

河内國金剛寺とがやいふ山寺にはべりける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人となりて飛びありく。といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふまことに食ひやおほせたりけん、五穀のたぐひ食ひのきて、やうく兩三年になりけるにげにも身も軽くなる心地し

金剛寺
今、大阪府南河内郡天野村にあり、聖武天皇の御代に僧行基の創建したるもの。眞言宗古義派。

のぼりなん

いるべきもの

もたりける

心や臆したりけん

ければ、弟子どもにも、我は仙人になりなんとするなり。と常はいひて、今々として、内々にて身を飛びならひなどしけり。既に飛びてのぼりなん。といひて、坊も何も弟子どもに分ち譲りて、のぼりなば仙衣せんいを着るべし。とて、かたの如く腰に物をひとへ巻きて出て立つに、我が身には、これより外はいるべきものなし。とて、年頃祕藏してもたりける水瓶すいびんばかりを腰につけて、既に出てにけり。弟子、同朋名残惜しみ悲しむ。聞き及ぶ人、遠近市の如くに集まりて、仙にのぼる人見んとてつどひたりけるに、この僧、片山の岨しづみに差出でたる巖の上にのぼりぬ。一度に空へのぼりなんと思へども、近くまづ遊びて、事のやう人々に見せ奉らんとて、かの巖の上より、下に生ひたる松の枝にゐて遊ばん。といひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈ばかりありけるに、さかさまに飛ぶ。人入目をすまし、あはれをうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆し

飛びあがらん
ずらん

たゞ死にに死
ねれば

笑ひのゝしり
て

あるにもあら
ぬやうにて
とかくいふば
かりなくて

えせず

たりけん、かねて思ひしよりも身重く、方うきくとして弱りに
ければ、飛びはづして、谷へ落ち入りぬ。人々あさましく見れども、
これほどの事なれば、やうあらん。定めて飛びあがらんずらんと
見るほどに、谷の底の巖に當りて、水瓶も割れ、我が身もさんく
にうち損じて、たゞ死にに死ねれば、弟子眷屬騒ぎ寄りて、いかに
と問へど、いらへもせず、わづかに息の通ふばかりなりけれど、と
かくして坊へかき入れつ。ここに集まれる人、笑ひのゝしりて歸
りけり。

さて、この僧あるにもあらぬやうにて、病み臥せり。とかくいふ
ばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかり
にては命生くべくも見えねば、年頃いみじく食ひのきたる五穀
をもて、さましくいたはり養へば、命ばかりは生きたれども、足手
腰もうち折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふにも及ばず、もと

鳥羽僧正

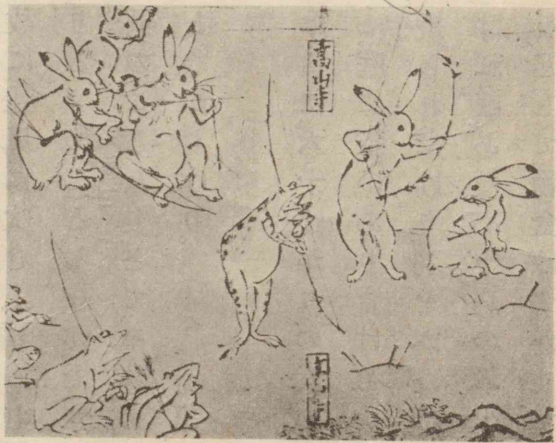
名は覺猷、平
安時代後期の
僧、保延六年
寂、年八十八。
法勝寺
京都白川の北
にあり、白河
天皇の勅願寺。
以後は廢絶し
た。

おもしろう。

の如く五穀を貪り食ひて、弟子どもにゆゑしく譲りたりし坊も
寶も取返して、かままりゐたり。仙
道に至る人、たやすからぬことな
り。

鳥羽僧正の繪かきたる人なり。いつほどの
二 鳥羽僧正

鳥羽僧正は、近き世には、ならび
なき繪かきなり。法勝寺金堂の扉
の繪かきたる人なり。いつほどの
ことに、供米不法のことありけ
る時、辻風の吹きたるに、米の俵を
多く吹き上げたるが、塵灰の如く
に空にあがるを、大童子法師ばら走りちりて、取りとめんとし
たるを、さましくにおもしろう筆を揮ひて書かれたりけるを、誰



鳥羽僧正の鳥歌戲畫

院 鳥羽法皇(第七十四代)。

をかしう。

今は昔

あな心う

かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入興ありけり。その心を僧正にお尋ねありければ、あまりに供米不法に候ひて、實のものは入り候はで、糟糠のみ入りて軽く候故に、辻風に吹き上げられ候を、ざりとてはとて、小法師ばらが取りとゞめんとし候が、をかしう候を書きて候。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米の沙汰厳しくなりて、不法のことなかりけり。(古今著聞集)

三 雀の報恩

今は昔、春つかた日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、蟲うち取りてゐたりけるに、庭に雀のありきけるを、童石を取りて打ちたれば、當りて腰を折られにけり。羽をふためかして、惑ふほどに、鳥のかけりありきければ、あな心う、鳥の取りてんとて、この女急ぎ取りて息しかけなどして、物食はず。かくて月頃よく養へば、やうく躍りありく。雀の心にも、かく養ひ生けた

いとほし

いぬ

ありし雀

露ばかりの物

なべての

多かり

るを、いみじく嬉しと思ひけり。いとほしければとて、飼ふほどに、飛ぶほどになりけり。今はよも鳥に取られじとて、外に出てて、手に据ゑて、飛びやす見んとて、捧げたれば、ふらくと飛びていぬ。

二十日ばかりありて、この女のゐたるかたに、雀のいたく鳴く聲しければ、ありし雀の來るにやあらんと思ひて、出でて見れば、この雀なり。忘れず來るこそあはれなれ。といふほどに、女の顔うち見て、口より露ばかりの物を落しおくやうにして、飛びていぬ。女、何にかあらん、雀の落していぬる物はとて、寄りて見れば、瓢の種をたゞ一つ落しておきたり。植ゑてみると、植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひ廣がりて、なべての瓢にも似ず、大ききになりたり。女喜び興じて、隣の人にも食はせ、取れども、盡きもせず多かり。子孫もこれを明暮食ひてあり。はてには、まこと

にすぐれて大きなる七つ八つは、杓しやくにせんと思ひて、内に釣りつ
けておきたり。

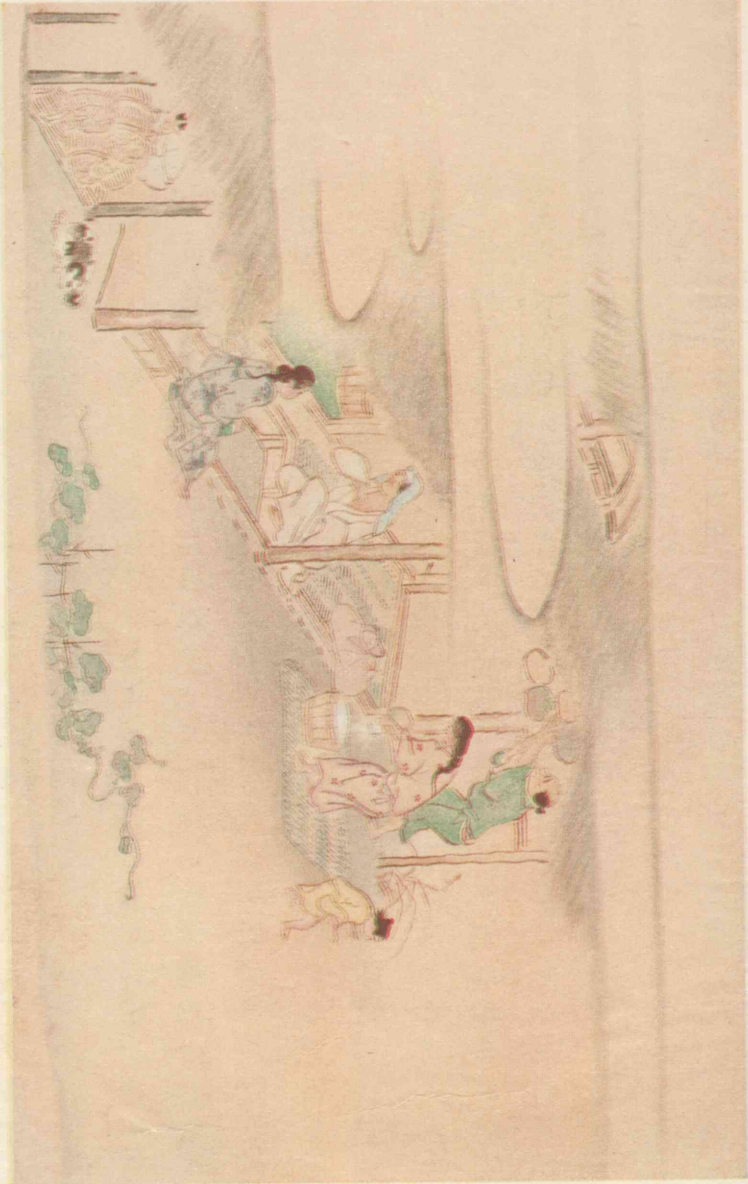
月頃經て、取りおろして口あけんとするに、少し重し。あやしけ

あさまし
ひととはた
雀のしたるに
こそ
たのもしき人

宇治拾遺物語古刊本

れども切りあけて見れば、
物ひとはた入りたり。何に
かあるらんとて移し見れ
ば、白米しろこめの入りたるなり。思
ひかけずあさましと思ひ
て、大きなる物に皆を移し
たるに、同じやうに入りて

あれば、たゞごとにはあらざりけり、雀のしたるにこそとあさま
しく嬉しければ、物に入れて隠しおきて、移しく使へばせんか
たなく多かり。さて、まことにたのもしき人にぞなりにける。隣の



雀の思報 宇治拾遺物語繪卷

いみじきこと
に羨みけり

人も見あざみいみじきことに羨みけり。

この隣にありける女、我もいかで腰折れたらん雀見つけて飼はんと思ひて、朝ごとに窺ひ見れば、背戸のかたに米の散りたるを食ふとて、雀の躍りありくを、石を取りて、もしやとて打てば、あまたの中に、おのづからうち當てられて、え飛ばぬあり。喜び寄りて、腰よくうち折りて後に、取りて物食はせ、薬くはせなどしておきたり。一つが徳をだにこそ見れ、ましてあまたならば、いかにたのもしからんと思ひて、籠のうちに米撒きて窺ひゐたれば、雀ども集まりて食ひに來れば、また打ち／＼して三つうち折りぬ。今はかばかりにてありなんと思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取入れて、物食はせなどして、月頃経るほどに、皆よくなりたれば、喜びて外に取出でたれば、ふら／＼と飛びて皆いぬ。
十日ばかりありて、この雀ども來れば、喜びて、まづ口に物やく

さればよと

はへたると見るに、瓢の種一つづつ皆落していぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもするくと生ひ立ちて、いみじく大きになりたり。これはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。數の少ければ、米多く取らんとて、人にも食はせず、我も食はず。子ども、隣の女房は、人にも食はせ、我も食ひなどこそせしか。これはまして三つが種なり。人にも食はせ、我も食ふべきなり。といへば、さもとと思ひて、近き隣の人にも子どもにも食はせ、我も食ふに、苦きこと物にも似ず、きはだなどのやうにて、人々も子どもも我も物を吐きて惑ふ。女思ふやう、皆米にならんとしけるものを、急ぎて食ひたれば、かくあやしかりけるなめりと思ひて、残りをば皆釣りつけておきたり。

あやしかりけるためり

さもとと思ひて

月頃経て、今はよくなりぬらんとて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまで獨り

そこらの

ゑみして、桶を寄せて移しければ、蛇、蜂、むかへとかけ、蛇など出でて、目鼻ともいはず、一身に取りつきてさせども、女、痛さも覺えず、たゞ米のこぼれかゝるぞと思ひて、暫し待ち給へ、雀よ、少しづつ取らん。といふ。七つ八つの瓢より、そこらの毒蟲ども出でて、子どもをもさし食ひ、女をばさし殺してけり。雀の腰をうち折られて、ねたしと思ひて、よろづの蟲どもをかたらひて入れたりけるなり。隣の雀は、もと腰折れて、鳥の命取りぬべかりしを養ひ生けたれば、嬉しと思ひけるなり。されば、物羨みはすまじきことなり。



づ出群の蜂・蛇

(宇治拾遺物語)

新村出

言語學者、文學博士、静岡縣の人、明治七年生。

柿の七絶
唐の段成式の隨筆「酉陽雜俎」に見える。

九 思ひ出す樹木

新村 出

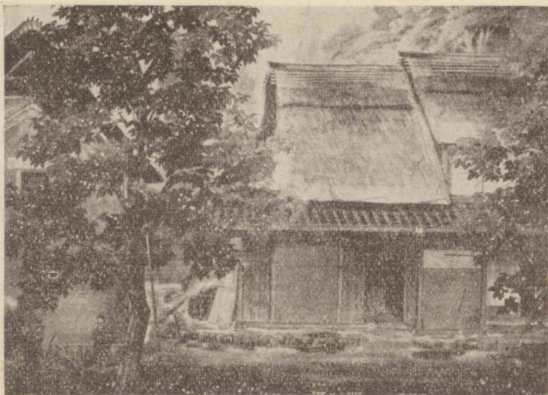
柿の樹は、私の最も好きな樹木である。東洋的であるこの樹木は、支那人が古く柿の七絶などと稱して、一に多壽、二に多蔭、三に無鳥巢、四に無蟲蠹、五に霜葉可飮、六に嘉實、七に落葉肥大、かくの如く數へたててほめてゐる。三と四とは、必ずしも然りとはいへないやうである。私はむしろ柿の五絶として、第一に柿若葉、第二に蔭多き青葉の中の花、第三に柿紅葉、第四に落葉後の枝ぶり、第五に果實、この五つの特長を挙げたい。

澁柿は論外として、柿の實のうまさ、その色あひ、その柔かみ、滑かさは、日本一ともいはれるであらう。「かき」には漢名に異名も多いが、朱實とも赤實果ともいはれてゐる。随つて古くより日本の「かき」は、「赤き」とか「赤木」とかいふ語源説が出てゐる。即ち果實の色

骨子としてゐる

美濃
岐阜縣。

洗濯や
「猿蓑集」に見える薄芝の句。



柿 若 葉 (中村静思筆)

彩が特長となり、語源をなす。桃太郎の桃、猿蟹合戦の柿、固有の果

實をもつて骨子としてゐる昔語も有難い。私は毎年初夏、晩秋、初冬の頃、美濃路を上り下りする時に、必ずその山間の柿樹を愛賞する。花は特に賞するほどでない寂しい花であるが、

洗濯や衣にもみこむ柿の花
といふやうな名句もある如く、俳諧趣味があつて、捨て難い。その蔭多き柿青葉の下にほろ／＼と落ちて來るのも、あはれが深い。花を數へないのは尤もだとしても、支那の風流人が落葉後の黒ずんで、くつきりした枝ぶりを賞せぬのは

藝備 安藝と備後。
いづれも廣島
縣。
八雲御抄
順徳天皇御撰
の歌學書。

寂蓮法師
俗姓名は藤原
定長、鎌倉時
代の歌僧、建
仁二年寂。
珍碩
濱田氏、江戸
時代初期の俳
人、歿年不詳。
大學
京都帝國大學、
京都市左京區
にある。
同志社大學
同上京區にあ
る。

意外である。柿紅葉では、三四年前の十一月の初に廣島から歸洛する時、時雨日和に、藝備の山村を汽車の窓から見わたした時に見たそれが私の眼底に残る。八雲御抄の紅葉木の條下に「かへて」と「まゆみ」と「は」と「きり」と「つた」は、それこれ等の外に「かき」と「さくら」とをお挙げになつたことを嬉しく思ふ。

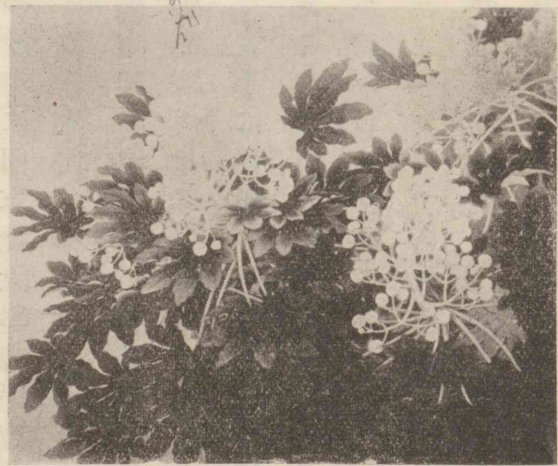
山里は柿の紅葉に鳩鳴きてしぐれもふりぬ風もさ
むけし

と詠じた寂蓮法師の歌の趣を、私は中國の山里に味はつたのであつた。近江の俳人珍碩が、

鳩鳴くや澁柿原のそば畠
と野趣にくだけたのと相對する趣だ。

櫻の紅葉も、澁くていいものだ。今日も大學へ行く途中、毎年期待してゐるその期待を裏切らず、同志社大學の小使室みたやう

な小さな建物の側に、さびしく立つ櫻の若木の薄紅葉を見るこ
とが出来た。かういふ平凡な風景
の中に美を見出すのは、嬉しさも
一入である。この櫻紅葉も、この數
年來毎年私の見るものにして獨
り楽しんでゐる樹木の一つであ
る。



（筆畝月木荒）手 八

汽車の窓から眺める樹木では、
駿河や安房の海岸地帯の山あひ
に、育つ枇杷の樹も、見るものにし
てゐる一つである。特色のあるあ
の葉の形、あの伸びた新芽の匂、そして花のさび、人も鳥も共にす
さめぬ、侘びた氣持は、全く俳句の趣味である。

駿河 靜岡縣。
安房 千葉縣。
花のさび

八手の花は、枇杷の花の咲く年末近い時分に咲くので、近年の和歌の好題材となつてゐる。宅の庭には隅にまだ小さいのが一二本あるだけだが、私は昨今電車の途中に、同志社大學の學苑のあちこちにこの花の咲きはじめてのを愛賞する。

柵の花に氣が付きはじめたのは、昨年十一月、小春日和の午後、大槻家累代の墓地に參詣しようと思つて、高輪東禪寺に始めて出かけた時、寺の門を入るとすぐ右手に、可なり育つた柵の樹が一本、こまやかな白い花を葉ごと／＼につけてゐるのを、飽かず見入つた時からである。あんなかはいらしい花が、あのとげとげしい葉のもとについてゐようとは今までつい知らなかつた。佛縁淺からずともいはれよう。その後もう一度このお寺を訪うた時には、晩春であつたと思ふが、移し植ゑられてか、眼につかなかつた。惜しいことである。ゆくりなく懐かしいと思つた一本の

大槻家
江戸時代末期の蘭學者大槻磐水から、その子磐溪、磐溪の子如電、文彦と、大槻家には代々學者を出してゐる。
高輪
東京市芝區、東禪寺、慶長の頃、南和尚の創建、佛縁淺からずゆくりなく

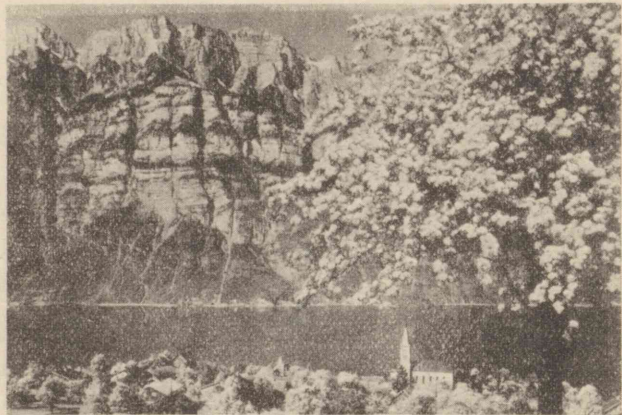
愛着の念が宿る

樹にも、愛着の念が宿る。

平福百穂
日本畫家、歌人、昭和八年歿、年五十七。

千紫萬紅

櫻花爛漫



麓山のスプルア

日本の高山のお花畑といふものは、私はまだ一度も見ることがない。向後見る機は全くないであらう。しかし外國で二十四五年も昔、スピスのお花畑を見たのは四月の末であつたかと思ふが、桃や李梨や杏、それ等の果樹の白い花盛り、その下草の千紫萬紅、名なども知らぬ百花爛漫、一生一度しか出あはぬ光景であつた。この頃取出して讀んだ故人平福百穂畫伯の歌集「寒竹」のうちの二首

かき
枝

九思ひ出す樹木

山里に白くふくめる梨の花春いまだ寒しみちのく
にして

ひとときに芽ぶきたち匂ふみちのくの明るき春に
あひにけるかも

とある感興をあはせたやうな氣分に私はスキスで浸つてしま
つた。

(花鳥草紙)

一〇 植 林 植 林

窪田空穂

今年の五月、久しぶりで私は、郷里——長野縣の松本平の一農
村の、初夏の光景を眼にする機會をもつた。これは、その時の印象
の一つである。

客となつて座敷にゐた私のところへ、年は幾つも違はない當
主の甥が、雪袴をはいて入つて來た。

窪田空穂
名は通治、歌
人、早稻田大
學教授、長野
縣の人、明治
十年生。
松本平の一農
村
長野縣東筑摩
郡和田村。松
本平とは、同
縣松本市の附
近の平野をい
ふ。
機會をもつた

「落葉松林へ行つてみませんか、天氣もいいから。——實は、茂り
過ぎたので、間引をさせようと思つて、人夫をやつてあるので、見
に行く必要があるんです。」

落葉松林。甥は、その名で私にも通ずるかのやうにいつてゐる
が、しかし私にはすぐには通じなかつた。「あれだな」と理解するま
てには、極めて短いながら、或時間が必要だつたのである。

その「あれだな」といふのは、記憶の蘇りである。そしてその記憶
は三十年前のものである。

その頃の私は、二十歳を二つ三つ出たのみの青年で、そしてこ
の農家の次男であつた。その頃は父も丈夫であつた。兄は無論元氣
一杯であつた。どういふ徑路であつたか、さうしたことに興味を
もたなかつた私は、聞かうともしなかつたが、父と兄とは、西つ原
に可なりな廣い土地を買つた。そして父の意見で、そこに落葉松

の植林をすることになった。どこからか落葉松の苗木が送りこまれて来た。丸箸ほどの太さの、二尺足らずの丈のみすぼらしい筵包の山であつた。幾人かの人夫は雇はれた。植林が始められることになった。

老いた父は、いつにない元氣で、楽しげな面持をして、自身世話役をしようと、雪袴をはき、草鞋がけて下り立つた。

「お前も手傳ひに來い。」

父に命ぜられる事は、私は拒むことは出来なかつた。厄介な事が始まつたものだと思ひながらも、私は幾日となく、その西つ原へ通はせられた。

一日二日は我慢もしたが、三日頃からは、私はつくづく厭になつてしまつた。廣い地域には、いつ作らせたのか、一面に畝が出来てゐて、その畝には、一定の間隔を置いて穴が掘つてあつた。私た

しげくと

ちは、その一つの穴へ一本の苗を、次から次へと植ゑてゆくのであつた。かゞみとほしてゐる腰は、次第に痛くなつて、伸ばさうにも伸ばせなくなつた。春の彼岸前のことで、手は凍えて来るが、温めるための懐手も出来なかつた。私は、並んで同じ事をしてゐる小學校仲間の人夫を、俄に不思議な人間に感じだした。もとよりおもしろさうでもないが、厭さうでもない。ゆつくりと、しかし休まずに、同じ調子で動きつゞけてゐる。まるで動力を掛けられた或機械のやうだ。どういふ人間だらうと思つて、しげくと見まもつたほどであつた。

落葉松の植林は、この事が済むと同時に私から離れた。離れると共に私の心から消え去つてしまつてゐた。今、甥に落葉松林といはれると、三十年前の記憶を不思議にも蘇らせ得たのであるが、しかし私の眼に浮ぶものは、植林をしつゝ見たあの廣い空

地であつて、いふところの落葉松林を想像してみることは出来なかつた。

私は落葉松林などとは見たくなかつた。しかし久しぶりに故郷の土を踏むといふことには、明らかに心をそゝられた。

甥と私とは、落葉松林のある西つ原への田圃道に立つた。

何といふ美しい光線だ。私はこの美しさまでも忘れてゐたと思つた。高原の水蒸氣の少い、澄んだ空氣をとほして来る光線の美しさを、その青白く顫へながら注いで来る美しさを、私は今始めて見るもののやうにさへ感じた。田圃も、遠く散らばつてゐる部落も、眞向ひに見える北アルプスの連峰も、それ等は私には珍しい光景ではなかつたが、しかしその連峰の頂を眞白にしてゐる雪を、この光線をとほして望み、そしてその眞白な連峰の頂と、輝きつゝ、澄みきつてゐる初夏の空との接觸するところを眺め

青白く顫へながら注いで来る美しさ

北アルプス

長野縣と岐阜縣との境の邊に連なる山々の稱で、槍ヶ岳、穂高山等四時雪をいたたく高山が聳えてゐる。

田圃路は……導いて行く

てゐると、これが自分の青年時代まで見て来たものかと驚かれ、これを忘却してゐたことがあやしまれた。

そこには何の物音もなかつた。をり／＼微かな野川の音が耳に来るだけであつた。青みわたつた田圃路は、靜かに私たちを導いて行く。

先へ立つた甥は、振返つて話しかけた。

「叔父さん、少し廻り路になりますがついでに勘次林を見ませんか。」

「何かあるのかい。」

「櫟があるだけです。だが、いかにも見事に育つてゐますから、見ていたゞきたいのですが。」

私は黙つてゐた。甥は少し感傷的な語調で話しつゞけた。「母がしみ／＼いつてゐましたよ、勘次林を買つて、あの櫟を植

感傷的な語調

ゑたのもお祖父様で、その時、母も「お前も見てだけおけ」といはれて、つれられて行つて、一日植付けの手傳をしましたつて。その時、私は乳呑兒で、背負はれて行つたさうです。私が乳を呑んでゐるところを見て、お祖父様が「今かうして大騒ぎをしてゐるが、この木は、おれの代には無論役には立たない。悴の代にも役には立つまい。だが、この孫の代になると、結構役に立つぞ。とにかく薪は家の林で間に合ふやうになる。つていはれたさうです。母は若い心に、この赤兒の代なんて程遠い、夢のやうな話だと思つて、平氣で聞いてゐたさうです。それがどうです。今、私の代になると、お祖父様の仰しやつた通り、薪には事を缺きません。農家といつても、薪まである家は少いもので、これは全くお祖父様のお蔭です。母のいふのもそこです。」

土を土臺とした農村の生活

新緑のうちの
新緑ともいふべき

事よりも、その事をとほして語られてゐる父の心であつた。父は時間を數へるのに、自分の代、子の代、孫の代と、一代を單位としてゐる。その父の子の私には、どういふ單位があるか。一代は愚か、一年も單位にはならない。一月といひたいが、それもあやしい。いはば、その日暮してある。そしてこれはやがて、土を土臺とした農村の生活と、人を土臺とした都會の生活との相違ではないか。

私は黙つて歩いた。甥も黙つてしまつてゐた。田圃は畑となつた。畑は桑畑となつた。桑畑は松林をまじへて來た。日にきらめいて流れてゐる小川の橋を渡つた。額には汗がにじんで來た。

一つの松林の縁を廻つて離れると、今までの暗い縁とは反對に、極めて明るい薄緑の連りが、私の眼の前に展けて來た。みづみづしい、濃やかな、そして柔かな、新緑のうちの新緑ともいふべきこの感じは、私の經驗では、落葉松の外にはないものである。

これがそれだらうかと、驚きとあやしみと共に思つた。
「あれかい。」

「え。」

と甥は事もなげにいつた。

初夏の光を一杯に吸つて、緑にきらめきつゝ、緑に煙りつゝある落葉松林に、私は呑みこまれるやうに近づいて行つた。

落葉松林の美しさよりも、その美しい落葉松林の存在といふことの方が、私の胸を占めて來た。三十年前丸箸ほどの太さの、二尺足らずの落葉松の苗、あれがこんなにもなつたのか。植ゑ終つた後に見わた

私の胸を占めて來た



落葉松林

眼底に映してゐた

その日に追はれ、その日を追つて

私の胸に寒さをもたらして來た

すと、茶色の苗木の、あるかないかもわからなかつたのが、一樣に空に伸びあがつて、その繁る葉は日光をもとほさず、ここに一つの特殊な世界を形づくつてゐる。この落葉松林となり終つたのか。

今は世に亡き父は、あの苗木を植ゑた時に、早くも今のこの光景を眼底に映してゐたことであらう。父の心は、この落葉松林に宿つてゐる。父の子の、この落葉松林の苗木の一部を植ゑた私といふ者は、あの苗木のこれほどまでに育つた間を、どうしてゐたといふのだ。東京といふ大都會の隅に、その日に追はれ、その日を追つて、あちらこちらとさまよつて過したのみではないか。汗ばんだ顔に觸れる落葉松林の新緑の香は、私の胸に寒さをもたらして來た。

(消燈前)

心理描寫

一一 山科の大石内藏助

大佛次郎

大佛次郎
本姓名は野尻
清彦、作家、
横浜市の人、
明治三十年生。
山科
今の京都市東
山區山科。

山科にも乾いた夏が來てゐた。

大石内藏助が屋敷を買つたのは、街道からやゝ離れた西の山村だつた。附近には樹木が多く、竹藪が多い。山は緑で燃えるやうだつた。書見に疲れて眠る頃に、ほとゝぎすの啼くのがよく聞えた。その聲は、今、眞晝のしん／＼と山や森が鳴るやうに思はれる。蟬の聲にかはつてゐる。田舎造のがつしりして、檐の深い小暗い家の内に、縁をわたる風が忍び入つて來て、床の間に懸けた軸を靜かにゆする。

内藏助は心を澄まして、しみ／＼とこの閑日を味はつてゐた。茶を煮ながら、好むところの書を繙いて、やゝ疲れ、ば庭に鬱蒼たる楓や椎や碧梧の樹に目を向ける。山の小鳥が降りて來て、日

心を澄まして
しみ／＼とこ
の閑日を味は
つてゐた

つ。ばむ

沈黙を守つて
ゐる

向に星をまいたやうな松葉牡丹の根に、蟲をついばんでゐる姿を見ることがある。またこの明窓のほとりの人となつてから内藏助は、平凡と見えた木々の姿にも、人間の顔に現れてゐるやうなそれ／＼の個性がいみじく現れてゐることに氣がつくやうになつた。一つ木でも、晴れた日、または灰色に曇つた空の下に見る時は、おのづから木そのものも心持をかへて、晴々と樂しげに見えることもあれば、悲しく沈黙を守つてゐることもあり、葉をすりあはせて、何かひそ／＼とさゝめきあつてゐるやうに感ぜられることもある。内藏助には、これは一つの發見だつた。人間の住む世界といふものは、大方は知らずに過してしまふこの種の祕密を、いかばかり多く藏してゐることか。味はへば味はふほど、深い濃やかな味を幾らでもにじみ出して來るのではあるまいか。

時世に裏切つてゐる

元祿

第百十三代東

山天皇の御代

徳川五代將軍

綱吉の世。

心持を豊かに

してゐた

日に傲つて咲

く

赤穂

今の兵庫縣赤穂町。

とりわけて内藏助は、牡丹の花を愛した。



牡丹 (筆倚雪村小)

枝ぶりをため、水をやつてゐる姿を見ることが珍しくなかつた。

時世に裏切つてゐるやうに見えて、やはり元祿といふ時代の華やかさが自然と心持を豊かにしてゐたためであらうか、日に傲つて咲くこの豪華な花に、自分の心持に通ふものがあるやうに思はれて、赤穂にゐる頃から年々培養につとめてゐたのだが、こちらへ移る時も苦心して運ばせて植ゑつけたし、また新しい株を取寄せて、庭の日あたり、いい場所を選んで、妻子に手傳はせ、

悠々と餘生を送らうとしてゐる

大夫

大名の家老の

稱で、ここは

内藏助を指す。

大學殿

淺野長廣。淺

野内匠頭長知

の弟。

面皮ある武士

冷光院

長矩の法名。

憾を黄泉にのませられる

田地も屋敷の周圍に廣く買ひ求めし、京から大工を呼んで、好みに従つて瀟洒な離室を普請させる。誰の目にも、妻子と團欒し、悠々と餘生を送らうとしてゐるとしか見えないのだつた。

今日は江戸からまた手紙が來てゐたか。

大夫には、大學殿御安否お見届けの上、御賢慮あることと拜察し奉る。されば、それをお見届けなされた後は、亡君の御志をなされまするか、お互に亡君海嶽の御洪恩を蒙り、今日まで面皮ある武士として來りながら、百の苦心も眞の忠節とは相成らぬと確信仕る。且大學殿は御連枝にはおはせ、既に御別家として立たせられる。我等の主君はたゞ冷光院殿でござる。その主君金玉の御身と名家の御家を擲たせられ、御鬱憤を散ぜられんとして、その事成らず、憾を黄泉にのませられるに、臣下として當の敵を見遁し、ひたすら御分地の大學殿を世に出し奉る

名を大學殿の
擁立にかりて
その生を食る

じれ

上野
吉良上野介義
央

このみに従事せば、一世の人は、赤穂の遺臣たちは名を大學殿の擁立にかりて、その生を食る。とより外は申さざらん。かくては武士の道が相立たぬではござらぬか。これだけのことを、文字と文字との間に烈しい憤怒をにじませて、いひよこして來たのである。堀部安兵衛、小山田庄左衛門、武林唯七、高田郡兵衛、その他、血氣さかんな壯士たちのじれきつてゐる様子が、目に見えるやうに思はれる。

「我等の主君はたゞ冷光院殿でござる。」

安兵衛だな……と、思はず微笑した。この前の手紙に「たとひ日本に天竺を添へて大學殿に下し賜はるとも、上野生存は許されぬこと」といつて來たのも彼であつた。かほどまでに一向きに先君の御上を思つてゐてくれるのである。……内藏助は手紙を卷

とゞめかねた
微笑がゆるや
かに動いてゐ

目に見えぬ鞭
となつて

徳のあつた
長者の風

君の心を
よきことに
しきたる

き返すことも忘れて、庭に向けた目を自然と潤ませて來てゐた。しかも口には、明るい水のそよぎに似て、とゞめかねた微笑がゆるやかに動いてゐるのである。

この若い人
人の純眞な心
持は、内藏助の
心に、目に見え
ぬ鞭となつて
感ぜられる。こ



筆染の雄良

の人々の清らかな心を思ふ時、自分の心持があまりに世馴れて策の多いことが振返られ、厭はしいやうに思はれることがあつた。少年のをりから寛厚とされ、長者の風があるやうにいはれて來たことに對して、これは即ち生れつき自分に世の中に折りあ

事情は否應なく……自分を置いてゐる

統制のもとにをさめておく

尾崎村
今の兵庫縣赤穂郡尾崎村。赤穂町の東南にある。

ふことに馴れた卑屈な性質があつたためではないか……と時たま考へるのは、皆かういふ瞬間であつた。振返つて考へると、自分分は世間面があまり綺麗過ぎた。しかもこれに氣がつくやうになつた今、事情は否應なくこれまでよりも政略を用ひねばならぬ立場に自分を置いてゐるのだつた。復讐のことは、この世間といふ何よりも扱ひにくい怪物を相手としてゐるのである。敵が放つ諜者がある。いや、それよりも多勢の同志の個々の希望を抑へ、一つの團體生きものとなして、復讐の一事を目標に整然たる統制のもとにをさめておかなくてはならない。何よりも自分の政治家としての手腕に頼らなければならぬのである。これは今、自分が何よりも嫌つて捨てたく思つてゐる才能ではなかつたか。

この苦悶は、疔を病んで尾崎村の假寓に生死の境をさまよつ

ためらふ心持を叱つて

てゐた時に、内藏助が最も烈しく感じたものであつた。或時は復讐の志が果して自分の本心から自然に出たものであつたか、或は幾分でも無理があり、虚榮の働いてのことであつたかさへ疑はれて、ためらふ心持を叱つて、これを見極めようと努めたのである。あれは、たとへやうもなく恐しい時間であつた。

梅雨は晴れた。心の曇も拭はれた五月空が、たゞあつた。

自然に。

自然に……。

内藏助はこれだけを考へてゐることにした。心の無理のない動きに従ふことである。前途は茫漠としてゐる。しかし心は、この霧の中にも正しい道を知つてゐて、必ずそれを探し出して行くことであらう。その確信はある。まだ見えないが、太陽はこの霧の中にいる。いや、おのれの心の中にいる。自分の下根の智慧は、たゞ

下根の智慧

心眼の曇らせ
られる

これの手足であつた。

されば、安兵衛たちの手紙とて、今の内藏助に快い感動を與へても、これによつてその心眼の曇らせられることは決してない。

「若いぞ、皆は。」

自分の世智を誇るのではなく、たゞ心からの好意をもつて、優しくかう叫びかけてゐるのだつた。

「もつと自分をなくしてくれ。名前なまえは私のことだ。その私を棄れて、もつと根元を見てくれたならば、世の中がどんな風に自分たちを批判しようかと、何の頓着もいらぬことではないか。」

内藏助は庭の木々を眺めながら、うつとりとしてかう考へてゐるのだつた。

ちやうどそこへ原惣右衛門がたづねて來たので、内藏助は手紙を見せた。蔭のない野道を歩いて來た惣右衛門は、半白の鬢むすに

にじむ汗を拭ひながら黙讀しはじめた。

惣右衛門のみに限らず、この附近から京都にかけて集まつてゐる同志の者は、内藏助とはよく會ふし、江戸の人々に比べて、どこまでもこの人を信頼してゐて、冷靜に構へてゐるのだつた。

「これから返事を書かうと思つてゐたところだ。私が、出來ることなら大學様を立てようとしてゐるのは、無論淺野の御名跡みなせきのことを考へるからで、大學様の御ためといふわけではない。況や、これに名をかりて生を偷んでゐるわけでもない。また世間の毀譽きよの如きは、最初から問題ではない。江戸の連中がやきもきしてゐることはよくわかる。場所が場所、世間の口くちがやかましいから、若いだけにどうしても影響されずにはゐないのだらう。皆こちらへつれて來てしまへば、一番いいのかも知れませぬな。今度はひとつ、少し強くいつてやらうかと思つてゐる。當分すつかり

生を偷む

忘れてゐてくれ、ばいいのだ。」

「いや、それは……。」

惣右衛門も笑つた。

「さやうなことを仰せられたら、どんなに立腹するかわかりませぬぞ。……まあ若い者はこの元氣でいいのでせう。私の心配してゐるのは、むしろ、どれも血氣さかんで純粹な人々ばかりだから、今こんな力を入れてゐても、急にがらりと違ふ方角へ向つてしまふことです。ないことではありません。この元氣、この一徹な考へ方でゐてくれ、ば何よりです。若い時分は誘惑が多いから……。かうして、誠心誠意このことを思ひ詰めてゐてくれ、ば、まことにその心配はない。」

「いや、原氏、私の考は別です。銘々がもつと氣樂に構へて、したいことをしてゐてくれ、ばいいと思つてゐる。何をしようが、皆の

勝手だ。たゞ、いざといふ時に間違ひなく來てくれ、ばいいと思つてゐます。これはむづかしいこととせうかな。」

「さあ……さう手際よく仕分けられますかな。とにかく若いのだから……。」

「さうかなあ。」

内藏助は笑ひながら立つて行つて、碁盤を持ち出して來て据ゑた。

「本心をいへば、いづれ天壽に背いて死なせる人々だと思ふと、何だか今からそのことばかり考へさせておくのが氣の毒なやうに思はれる。短いときまつた命をもつとくつろいで、したいことをして待つてゐてもらひたい……やうに思ふのさ。」

「仕事のことだけお考へになつてはいいかゞです。感情はぬきです。」

天壽に背いて

「さうなれば達人だらう。」
「ばちりと先手を置いた。」

「この間のかたきだ。」

「見事討ちますか。」

「討つ、討つ。」

五十四歳の惣右衛門の心臓に、急に大きな掌で握られたやうな衝動がわたつた。石をさぐりながら、思はず口を一文字に引きしめてゐる。

二人無言の境に、蟬時雨が碁盤のおもてを蔽つた。(赤穂浪士)

一二 人の脚

大町 桂月

青年は走るものなり。壯年は歩くものなり。老人は坐るものなり。人あまりに幼ければ、這ふのみにて歩く能はず。あまりに老ゆ

おほまけいげつ
大町桂月
名は芳衛、文
學者、高知市
の人、大正十
四年歿、年五
十七。

れば、腰が抜けて起つ能はず。

青年時代は精神が最も熾に發達しつゝある時代なり。進取向上の氣象に富む。記憶力も強ければ、想像力も強し。すべての事の進歩が早し。その精神の活動を譬ふれば、走るなり。人はこの際に於て、十分に力量を養成すべし。いはゆる自我發展といふことは、この際に最も必要なり。一人前以上の價あり、どこへ出でてもしけを取らぬやうに努力しておかざるべからず。走るは可なれども、あせるべからず。あせらば、頭が熱して、足もとがお留守になるべし。轉ぶべし。電信柱に衝突することもあるべし。溝に落つることもあるべし。

人の身長・體格の發達がとまる頃には、人格も一通り出來てゐるなり。それより後精神上の發達が全くとまるものもあり、發達するものも徐々たり。その精神の活動を譬ふれば、歩くなり。走る

足もとがお留守
守になる

坐るの外なし
概して



(筆總百福平) 泰山登の月桂

やうには速からず。されど走らば、走ることゝ氣がとられて、左右を見まはすことも出来ず。歩かば、ゆるく見物が出来るべし。この際、人は分別がつくものなり。腹をつくるは、實にこの際にあり。自我發展といふ事も依然として必要なるが、それをあまりに無鐵砲に、金力や權力に向つて求め過ぐれば、恐らくは「亢龍」の悔あるべし。上らるゝだけ上らば、人は坐るの外なし。老人は概して進歩といふことなし。その精神の活動のさまを譬ふれば、坐るなり。人によりては、この際、尊さを増すもあり、一向尊くならぬもあり。尊くならぬは、薄つべらの人にして、尊くなるは、深みのある人なり。人格も、大智も、徳器も、この際に全く圓熟す。この際の自我實現は、眞の自我實現な

うき世の風波
を凌ぐ

り。銜氣なく、天真流露す。それも人物を磨き、うき世の風波を凌ぐてのことなり。青年時代の自我實現は、銜氣を免れず、空想も加はる。自我實現の未成品なり。自我發展は、己れを磨き上ぐるといふの意に解すれば、いつにても可なり。自我實現は、我をむき出しにするの意に解すれば、徳器の成就するまで考へものなり。

數町の路ならば走るべし。なほ進んで、二三里の路も走らるべし。されど千里をとほして走ることゝ出来ざるべし。歩くは、路を行くの常則なり。走るは、可なる時もあり、不可なる時もあり。朝、宿屋を出づる時は、非常に元氣にて、足の運びも速く、晩、宿屋に着く時は、意氣銷沈して、びつこ引くやうになるは、これまだ旅馴れぬ人なり。健脚家といふべからず。今日は威勢よく十二三里を行くも、明日は弱りて七八里となり、その翌日は更に弱りて五六里となるも、健脚家とはいふべからず。健脚家といふものは、一日歩く

に、朝も晩も歩行の速度が同じきなり。今日平氣にて十里歩けば、明日も平氣にて十里歩き、明後日も平氣にて十里歩く。これを學問に應用しても、事業に應用しても、いはば確かなる人にて、絶えず進歩すべし。

平地は速く元氣に歩き得ても、山に登るには、忽ちにおそくなるものは、平地には馴るゝも、山路には馴れざる人なり。我、かつて奥州に遊びて、終日路なき山嶽を跋渉せしことありき。その土地にて、山男と稱せらるゝ、健脚の青年に案内してもらひたるが、その人は、常に山に登りて、附近數里の山嶽、その足跡を印せざる限もなく、獨りにて米と鍋とを持ちて、露宿しつゝ、數日間山中を歩きまはることも少からざる由なり。その歩きぶりを見るに、平地を行くも、山に登るも、榛莽を押分けて、險路を上下するも、谷川を徒渉するも、巖石を飛び傳ひ行くも、足の速さに殆ど變りなし。さ

足跡を印せざる限もなく

あらまほし
安逸の境に居る

すがに馴れたるものなりと感服しぬ。余は山中にては大いに歩き惱みしが、平地に出づれば、青年よりも余の方が速し。その人笑ひながら、あなたも、案外足が弱くはなし。といふ。さきに余が山中に歩き惱みしを齒がゆく思ひしなるべし。
世をわたるにも、この人の歩くやうにこそあらまほしけれ。富に處しても、貧に處しても、安逸の境に居りても、千辛萬苦にあひても、達しても、窮しても、上に立ちても、下に使はれても、病みても、死に臨みても、いつも心に變りのなきは、最も信任すべき人にして、また最も尊敬すべき人なり。社會は、中堅として、かゝる人を要求す。

(ちび筆)

一三 羊飼の大陸氣分

後藤朝太郎

自分は北支那の田舎を歩いてゐて、よく幾百幾千の羊の群の

後藤朝太郎
言語學者、支那文化研究家、日本大學教授、愛媛縣の人、明治十四年生。

曠野を行く光景を見、また埃まみれになつてゐる牧童の純樸な放牧ぶりを見るので、その場面がいかに日本に見ない大陸的景觀であることを気がつく。

羊牧といつても、緑の絨毯みたやうな芝生の上に、洋式の放牧方法をもつて羊が飼養されてゐる場面などとは全く違つて、蕭寥たる廢墟を背景とする岩の多い荒野であるとか、駱駝隊のみ去來する人煙稀な山間の蒙古路であるとか、さもなくば一望千里、何等目を遮るものもない無人の境であるとかいふ處を自己の天地となし、毎日々々羊と一緒に起臥しつゝ、遊牧するのである。これが北支那蒙古路方面に見る羊飼の常態であるが、勿論その行程は大體包頭から北平指して來るものらしく、その間を、スリード時代の今日、全く時間の觀念から超越したやうな支那式の悠揚ぶりを發揮しながらやつて來る。そのあたりの牧童は蒙

人煙稀な山間
自己の天地となし

包頭
支那綏遠省にある都會。
時間の觀念から超越する

古人が多いとのことであるが、よく支那語を話してゐる。試みに彼等と一緒にになり、羊の群の中に加はつて、いろ／＼話しかけてみると、その話がまた人間離れのしたもので、趣味深く感ぜられるのである。彼等は目的地に着くまで六十日か、らうと、百日か、らうと、一向に平氣で、いら／＼することなんかはない。日數のかゝればかゝるほど、子羊の群は成長して來るわけだから、日數の延びる方がむしろ好都合なくらゐるものである。

しかし、さういふ彼等も、いつもぐづ／＼して群羊の相手にな



羊の群

青天の霹靂

リーダー
統率するもの。

つてゐるばかりでもない。時には、青天の霹靂とばかり、細い木の枝を先につけた麻繩の鞭を大地にたゞきつけて、えらい音を天地に響かせることがある。すると心得たもので、幾百幾千の羊は、いくらばら／＼になつてゐても、漸次集まつて来る。そして、リーダーを勤めてゐる山羊が「め、め」と、かはいい綴音を連呼しながら、首をあげ、勇ましく先頭に立つて、全體を統制せんとする姿を見せる。この山羊は、時として犬が代理してゐることもある。蒙古の曠野を一時にどつと幾百幾千の群羊が駈けだすのであるから、その蹄に蹴立てられる塵埃といつたら大變なものである。風さへ伴なはなければ、黄塵萬丈といふほどのことにもならぬが、先頭に立つてゐる山羊の姿を見失ふくらゐのことは珍しくない。そのためでもあらう、牧童の衣服などは、灰でもかぶつたかと思はれるやうに見える。

黄塵萬丈

支那に見るこの牧童の群羊に對する放牧ぶりといふものは、その天來の大陸的美質の然らしめるところである。と稱し得られるが、また見方によつては、群羊そのものが、牧童の心理を羊の氣持にひきつけ、同化せしめたものだと考へられる。實際、羊の氣持にすつかりなりすましてゐないことには、あゝした大陸生活に浸つてゐるわけにはいかぬ。その放牧生活から大成された一種の大陸氣分の味といふものは、日本人などの到底解し難いところである。

由來、支那では、上代から羊の生活は即ち自分たちの生活であると考へ、羊をも家族の一員と見なしてゐる。事實、また羊のお蔭で衣食住が出來て來たのである。随つて文字の上にも、美の字、善の字、義の字などにみな羊が含まれてゐるといつた風で、羊そのものが、生活行爲の善美の目標にまでされてゐる。今の支那の紳

羊牧の體驗に
負ふところが
多い

士淑女から農夫・漁翁^{キヌコウ}たちに就いて見ても、その性格中に必ず羊の氣分に似たとでもいひたいやうな優しいところが潜在^{モチ}し、そこに大陸的の抱容^{ホウヨウ}力が閃いてゐるのが認められるのも、この羊牧の體驗に負ふところが多いであらう。

一四 小鳥・水蟹

若山喜志子

つい軒近くのさわやかに枝を張りひろげた榎の茂みの中で、今朝から絶えずきよろろ、きよろろと細い聲をたててゐる小鳥は、何の鳥であらうか。春早くから永い間次々に家の周囲を取りまいて鳴きたて、時には騒がし過ぎると思ふほどにさへづりつづけて來てゐたさまゝの、小鳥たちは、梅雨が明けると同時に、いひ合はせたやうに皆どこかへ行つてしまつた。そして今日この頃では、ほんの僅かの花鶏^{オトリ}と、このきよろろの小鳥と、たつた一

海岸の松原の
蔭で云々
作者は沼津市
に住んでゐる。

羽だけ残つてゐるらしい鶯の聲を聴くだけである。

家の近くに夏鶯を聴くなどいへば、いかにも深山の奥でもあるかのやうに聞えるけれど、ここは海岸の松原の蔭で、人家こそ少けれ、市街に隣つた、まことに騒音の多い場所なのに、どうした氣まぐれ鶯なのか、去年の夏もおそくまで、やはりたつた一羽だけらしかつたが、盛んに鳴いたのであつた。

この地方では、近頃鶯が飼鳥として流行でもしてゐるのか、または他の何かの理由でか、鶯でさへあれば、鳴く音がどうであらうとかまはず捕つてしまふといふ人があつて、一冬に一人で五十羽も捕へたなどと、それを誇にしてゐるのを聞いたことがあつた。その人のいふのを聞けば、

「どんな藪鳥^{ヤブトリ}でも、とにかく鶯でさへあれば、一羽五十錢づつには間違ひなく捌けますからね。」とのことであつた。

鳴きほうけ

さういふことを耳にしてゐるだけに、その鶯が季節でもない今頃誰に遠慮もなく鳴きほうけ、鳴きたててゐるのを聴くたびに、私はたゞはら／＼させられ、追ひもやりたいあせり心を感じさせられる。

夏の暑さを忘れさせてくれる第一のものに私は水を挙げた。夏の水こそは、身に直接觸れ、ばなほ更のこと、たゞ目に見ただけでも十分涼しさを味はふことが出来る。

家の附近にその水の流のないのが淋しかつたのと、まさかの時の火の用心にもならうといふので、屋敷内に掘抜井戸を掘つたのは、今から九年ほど前のことであつた。そしてそれを掘ると同時に、庭に二十四五坪ほどの池を造り、水をなみ／＼と張らせてあるが、今日ではその水口の岩や周囲の石などに一面に蒼苔

古りさびた趣

古雅な味

が生え、いかにも古りさびた趣を添へてくれるやうになつた。何しろ地下三百五十尺もの底から噴きあげて来る純粹の地下水なので、その冷たいことも、水量の豊富なことも、そして水質のよいことも共に自慢の一つで、しかもその水脈は、嘘か真か知らないけれど、富士山の雪解水から成つてゐるとかいはれてゐる。それはとにかくとして、海岸から二町とは離れてをらぬ最低の土地であるとはいへ、噴き上げる水の壓力は地上七尺もの高さまで昇るのだから、この水壓を利用してのことだつたら、どんな贅澤でも自由に出来るわけである。

私がこの數年來、夏だけはどこにも出かけたかと思はないのは、他にも理由はあるけれど、一つはこの水が自由に使へるからである。

わが心夏は豊けし湧きあふれたえせぬ水を庭に引

たえせぬ
水

あぢうごころに
かゆきかくゆき

きつゝ

夏はよし庭の清水の見るからに冷たきを魚のかゆきかくゆき

などの歌に詠んだのは、去年のことであつた。

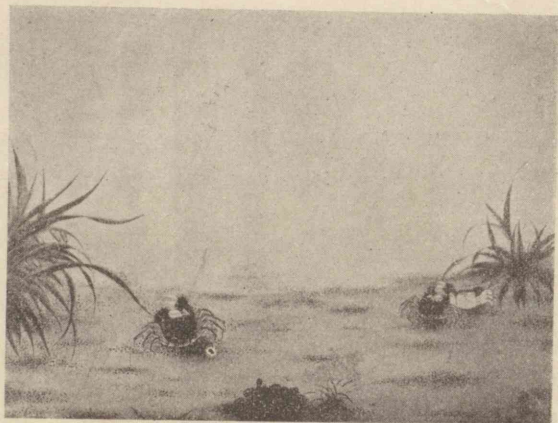
机の脇の障子をあけると、すぐに狭い濡縁があつて、それから二三步の先を池尻の細い流が、さゝやかな音をたててゐるが、その流の兩側は、この頃では小蟹たちのよい遊場になつてゐる。何といふ蟹か名は知らないけれど、缺の赤い蟹で、注意して見ると、實にさまざまの愛らしい動作をするのに、私はいつか、深い親しみを寄せるやうになつてしまつた。甲羅の大きさは、年を経たのになると、大丹波栗ぐらゐるは、あるだらうか、もつと大きいかも知れない。そんなのから普通の栗ぐらゐるの、また子蟹にな

ると、その小さいこと、ちやうど小豆粒ぐらゐるの、あんな色をした

愛らしいのもある。そして人間でいへば、青春期に入つた年頃ともいへようか、そんなのになると、缺も甲も實に鮮やかな緋の色の、ちやうど石榴の花の夢でも落ち散つてゐるかと思はれる美しさである。

行きあひて、けはひをかしく立ちむかひやがて別れてゆく小蟹かな

と歌に詠んだやうに、蟹は時にあの大きな缺を振上げるので、どんな争が始まるのかと思ふが、容易にそれはしない。それより却つて非常にユーモラスな動作を見



蟹 (郷倉千毅筆)

あぢうごころに
けはひをかし

ユーモラス
へうきんで、い
ひ知れぬ味をも
つてゐること。

せてくれるのである。人間の目から見れば、どうしても戯れてゐるとしか思はれない、何の役にも立ちさうに見えぬ木の葉の枯れ朽ちたのとか、松の落葉とかいふ風なものを、あの缺で高々と挟み上げたり、引つ張つたりして歩くのを、よく見受ける。つい二三日前だつたかも知、蜆の貝殻を一方の缺で差上げ、ちやうど踊つてゐるやうな姿をしてゐたのを見たのであつた。

蟹の物を食べる姿をしみじみ見た人があるであらうか。私のかつての歌に

手つきをぞする

涙なれ物を食ふるに蟹たちは人間我等の手つきをぞする

といふのがあつた。全く蟹のその時の姿ほど可憐なものはない。あの雙方の缺を交互に巧に使つて、飯粒などを克明に摘みむしつて口に運ぶ様子は、かはいといふよりむしろ物悲しい姿であ

涙なしには見
てゐられない

る。庭の水たまりなどに行き當つた時など、それを丁寧にあの缺ですくつて飲むのだから、何としても涙なしには見てゐられないのである。

一五 蟹山伏

シテ
山伏。
出羽の羽黒山
今の山形縣の
北部に聳え、
昔山伏の修行
した所。
大峰
奈良縣南部の
山麓で、この
山も山伏の修
行した所。
葛城
奈良縣と大阪
府との境にあ
り、同じく山
伏の修行した
所。

次第、貝をも持たぬ山伏がく、道々うそをふかうよ。シテ、これは、出羽の羽黒山の山伏でござる。この度、大峰葛城の役を勤め、たゞ今がかけ出でてござる。やい、強力あるか。強力はあ、御前にをります。シテ、早かつた。汝も知る如く、今度大峰葛城の役目を首尾より勤め、本國へ下る。何とめでたいことではないか。強力、御意なさるゝ通り、おめでたいこととござる。シテ、いかにもその通りぢや。いざ追つつけ行かう。汝も供せい。強力、畏まつてござる。シテ、さあ、来い。強力、参ります。シテ、やい、身どもも久々難行苦行

こなた

いかう。

問はせられ

そこな奴

を致したによつて、恐らくは空飛ぶ鳥も祈り落すことぢや。何と尊いことではないか。強力「仰せの通り、尊いこととござる。シテ」この如く行く道にて、何なりとも汝に、眼前にて奇特を見せたいなあ。強力「されば、こなたの行力の達した奇特を見たらうござります。シテ」やあ何とやら山が鳴る音のやうな。暗うなつたぞ。強力「されば、いかう山が鳴つてまゐりました。たゞ事ではござるまい。こはいこととござる。シテ」これは、しきりに鳴つて來たわ。油斷すな。かに「ど、ど、ど」。強力「そりや、何やら出ました。こはいものでござる。なう悲しや」。シテ「さても、おそろしいものぢや。問うて來い。強力「いや、私は厭でござる。こなた行て問はせられ。シテ」汝をつれるは何のためぢや。行て問うて來い。強力「いや、何程仰せられても、こればかりはなりません。こなたごされ。シテ」汝は臆病な奴ぢや。やい、そこな奴。汝はけうがつた姿ぢや。何者ぢ

行力を慢ずる

私次第になされ
よい肝を潰した

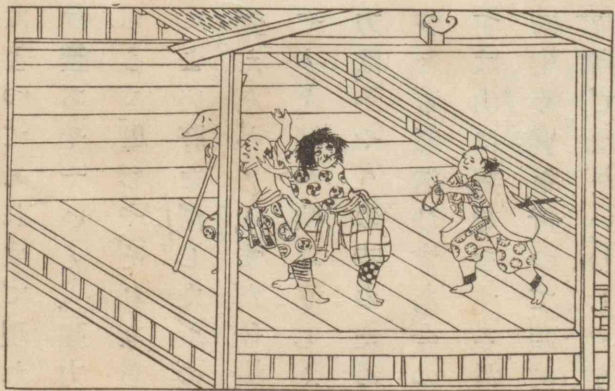
むしやうな

や。かに「兩眼天にあり一甲地に附かず。大足二足、小足八足、右行左行して遊ぶものぢや。汝行力を慢ずるによつて、これまで現れ出でてあるぞとよ。シテ」さては、きやつめは蟹ぢや。やい、強力「きやつは知れた。蟹ぢやわ。強力」何と仰せらるゝ。蟹ぢや。それなら私次第になされ。はてさて何者ぞと思つて、よい肝を潰した。おのれ、この金剛杖で甲を打割つてくれうぞ。覺えたか。まだ仕様が。ある。鼻竹篋をあててやらう。あゝ悲しや。蟹が挟みました。あいたあいた。なう、こなたの行力は、かやうの時のためとござる。早う祈りのけて下され。シテ「ちつとも氣遣ひすな。今の間に祈りのけてやらうぞ。それ山伏と申すは、山に寢起をする故に山伏なり。この頭巾は、布切七八寸眞黒に染め、襷を折つて、頭に戴くによつて頭巾なり。またこの數珠は、苛高ではない。むしやうな數珠玉を繋ぎ集め、これを苛高の數珠と名づく。かほど尊き山伏

などか奇特の
なかるべき

きつう。

が、一祈り祈るものならば、などか奇特のなかるべき。ぼろぼろぼんく。いろはにほへと、ぼろぼろぼろぼんく。 強力申しく、もはや祈らずとおいて下され。こなたの祈らせらるれば、なほきつう挟みます。あいたくく。 シテ何と、なほ締めるといふか。待てく、仕様がある。印を結んでかけて、今一祈り祈つて、祈りのけてやらう。 印結びいかに悪心の深い蟹なりとも、明王の索さくにかけ祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろぼんくく。橋の下の菖蒲あやむぎは、ぼろぼんく。誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろぼんくく。 シテあいか



かふいとるめ締ほなと何

やるまいぞ

四方赤良 よしのあきら
 本姓名は大田
 覃、蜀山人と
 も號した。江
 戸の人、文政
 六年歿、年七
 十五。
 鹿都部眞顔 しかつべまこと
 本姓名は北川
 嘉兵衛、江戸
 の人、文政十
 二年歿、年七
 十七。
 唐衣橘洲 からぎももぢしゅう
 本姓名は小島
 源之助、江戸
 の人、享和二
 年歿、年六十。

たあいたく。これは南無三寶なんぶさんぼうおれが耳も挟みをつた。あいたあいたあいた。 かにひやあり、ひやり、ほつぱい、ひやろ、ひい。二人やれ、蟹めが逃ぐるわ。やるまいぞくく。 (續狂言記)

一六 はら一杯

一 狂歌

春霞たちくたびれて武藏野のはら一杯にのばす日の

脚 狂言

鹿都部眞顔

あらそはぬ風の柳の絲にこそかんにん袋縫ふべかり
けれ

唐衣橘洲

ヒコガ

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕暮

鯛屋 貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらすくたびれもせず

朱樂 菅江

やれ〜と潮のひるめし急ぐなり青うなばらのへるにまかせて

栗柯亭 木端

世の中を何のへちまと思へどもぶらりとしては暮されもせず

宿屋 飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまる

鯛屋貞柳
本姓名は榎並善八、大阪の人、享保十九年歿、年八十

朱樂菅江
本姓名は山崎景貫、江戸の人、寛政十二年歿、年六十

栗柯亭木端
本姓名は不詳、大阪の人、安永二年歿

宿屋飯盛
本姓名は石川雅望、江戸の人、天保元年歿、年七十八

ものかは

秋と仰り川柳
雛祭これからかうは姉さんの

かみなりをまねて腹掛やつとさせ
寝てゐても團扇のうごく親心
よく寝れば寝るととのぞく枕蚊帳
武者一人叱られてゐる土用干
知る人にばかり強ひる子の給仕
こそぐつてはやく受取る遠眼鏡
病犬をちつと追つてはたんと逃げ
うたゝ寝の顔へ一冊屋根にふき
ここいらへ坐りませうと暑氣見舞
本ぶりになつて出て行く雨やどり

武藏坊
辨慶
源左衛門
佐野源左衛門常
世。

火もらひのふきく、人に突き當り
武藏坊とかく支度に手間がとれ
源左衛門鎧を着ると犬が吠え
義貞の勢はあさりをふみつぶし

(柳樽)

徳富健次郎
作家、熊本縣
の人、昭和二
年歿、年六十。

一七 草とり

徳富健次郎

二宮尊徳
通稱は金次郎、
江戸時代末期
の實踐道徳家、
安政三年歿、
年七十。

六、七、八、九の月は、農家は草と合戦である。天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。うつちやつておけば、比較的脆弱な五穀蔬菜は、野草に杜がられてしまふ。二宮尊徳のいはゆる「天道すべての物を生ず、裁制補導は人間の道」で、ここに人間と草との戦闘が開かれるのである。

老人子供、大抵の病人はもとより、手のあるものは十能でも使ひたいほど、畑の草、田の草は猛烈に攻め寄せる。飯焚く時間を惜

しんで餅を食ひ、茶もおちくは飲んでゐられぬほど、自然は休戦の息つく間も興へてくれぬ。

「草に攻められます。」とよく農家の人たちはいふ。人間が草を退治せねばならぬほど、草が人間を攻めるのである。

たつた二反そこらの畑をもつ美的百姓でも、夏秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに顔も洗はず、露蹴散らして草をとる。日の傾いた夕かげにとる。取りきれないで、日中にもとる。やつと綺麗になつたかと思ふと、もう一方では生えてゐる。草と蟲さへなかつたら、田園の夏は本當にいいのだが。と愚痴をこぼさぬことはない。全體草なんか餘計なものが何になるのか。何故人間が除草機械にならねばならぬか。草とりは愚かだ。うつちやつて、草と作物との競争をさして、全滅とも行くまいから、残つただけをこつちにもらへば済む。というても、實際眼前に草の跋扈してゐる

美的百姓
作者自身のこと。

のを見れば、とらずにはゐられぬ。隣の畑が綺麗なのを見れば、こ
つちの畑を草にして、草の種を隣に飛ばしても濟まぬ。近所の迷
惑も思はねばならぬ。

そこでまた勇氣を振起して草をとる。一本また一本。一本とれ
ば一本減るのだ。草の種は限りなくとも、とつただけは草が減る
のだ。手には畑の草をとりつゝ、心に心田の草をとる。心が畑か、畑
が心か、とにかく草が生え易い。油断をすれば、畑は草だらけであ
る。我等の心も草だらけである。あたりの社會も草だらけである。
我等は世界の草の種をとり盡すことは出来ぬ。しかし、うつちや
つておけば、我等は草に埋もれてしまふ。そこで草をとる。我がた
めに草をとるのだ。生命のために草をとるのだ。敵國外患なけれ
ば國恆に亡ぶて、草がなければ農家は墮落してしまふ。
美的百姓の彼は、とかく見るに美しくするために草をとる。と

心に心田の草
をとる
心が畑か畑が
心か

生命のために
草をとる
敵國外患なけ
れば云々
「孟子」に見え
る語。

年々や云々
松尾芭蕉の句。

清水却つて魚
棲まず
「水至りて清
ければ則ち魚
なし。」(文選)

仇なす

るとなれば、氣にして一本残さずとる。農家は更に賢いのである。
草を絶やすと、地力を盡すといふ。草をとつて生のまゝ土に埋め、
或は烈日に乾燥させ、焼いて灰にし、積んで腐らし、いづれにして
も土の肥料にしてしまふ。なつた敵は、身方である。年々や櫻を
肥やす花の塵、美しい花が落ちて親木の肥料になるのみならず、
邪魔の醜草がまた死んで土の肥料になる。清水却つて魚棲まず、
草一本もない土は、見るに氣持がよくとも、或は生命なき瘠土に
なるかも知れぬ。

畑の草にもいろ／＼ある。つまんで抜けば、すぼつと抜けて、し
かも一種の芳しい香を放つ草もある。この邊で鹹草といふ、丈矮
く莖紅ぶとりして、頑固らしく蟠つてゐても、根は案外浅くして、
一舉手に亡ぼされる草もある。葉もなく、花もなく、地下一尺の間
を一丈も二丈もはひ廻り、人知れず穀菜に仇なす名なし草もあ

蔓延まひまた蔓延まひ

露つゆにそぼ濡ぬれた

涙なみだである

る。厄介なのは、地縛り。單瓣の黄なる小菊のやうに可憐な花を咲かせながら、蔓延まひまた蔓延まひ、絲のやうな蔓は、引けばすぐ切れて根を残し、一寸の根でも残れば十日と経たぬ間にまた一面の草になる。土深く鋤を入れて掘り返し、丁寧ていねいに根を拾ふ外に亡ぼす道はない。我等は世を渡つて、往々この種の草に出會ふ。

草を刈るには、朝露の乾かぬ間、露にそぼ濡れた寝ざめの草は、鎌の刃を迎へてさく／＼切れて行く。一舉に草を征伐するには、夏の土用のうち、不精鎌ぶしょうがまと俗にいふ柄の長い、大きな蒲鉾形の鎌で、片端からがり／＼搔かいて行く。梅雨中には、搔く片端からついでしまふ。土用中つちようちゆうなら、一時間で枯れてしまふ。

夏草は生長猛烈でも、氣をつけるから案外制し易い。恐いのは秋草である。行末短い秋草は、種がこぼれて、生えて、小さなまゝで花が咲いて、すぐ實になる。そのあわたゞしさ、草から見れば涙

である。しかし油断して、うっかり種をこぼされたら、事である。一度落した草の種は、なか／＼急にとりきれぬ。田舎を歩いて、綺麗に鋤目の入つた、作物のよく出来た畑の中に草が茂つて、作物の幅が利かぬ畑を見ることがある。昨年の秋、病災不幸などでつい手が廻らずに秋草をとらなかつた家の畑である。
(みゝすのたはこと
草をとらうよ。草をとらうよ。)

一八 塵の中

樋口 一葉

十五日より家さがしに出づ。朝日の影まだ見えそめぬほどよ
和泉町いづみ二長町にちやうまち、浅草にかけても鳥越とりこえより柳原藏前やなぎはらくらまへあたりまで行く。この度の思ひたちは、もとより店つきの立派なるも願はず、場處のすぐれたるをも望まず、料ひくくして、人目にたつまじきあたりをとの定めなれば、つとめて小家こゝろがちにむさ／＼とせし

樋口一葉
名は夏子、作家、東京市の人、明治二十九年歿、年二十五。
十五日
明治二十六年七月。
和泉町、東京市神田區。
二長町、同下谷區。
鳥越、同浅草區。

落ちはふれて
住みけるもの
から

仰ぐも憂く

家といふ名ば
かりを貸す

行きくたり
とも

處をのみ尋ぬ。はやうより世に落ちはふれて、たよりなく、さゝやかなる處にのみ住みけるものから、なほ門格子は必ずあり、庭には木立あり、家には床あるものとならひけるを、天井といはば、黒く煤けて、仰ぐも憂く、柱ゆがみ、床ひくく、軒は軒に續き、勝手もとは勝手もとに並びぬ。さるが上に、大方は壘もなく、襖もなく、たゞ家といふ名ばかりを貸すなりけり。



(筆志弘石羽) 葉一口種

初のはどは、あまりのこ

とにあきれて、戸の外より見けるばかり、入りて尋ねべき心地もせざりしが、かくて行きくたりとも、はてもなし、とまれ問はん

ひしと並べて

美倉橋・和泉
橋

共に神田區に
あり、神田川
にかゝる。

邦子
一葉の妹。

とて、その隣の家につきて、問ふ親切にこれかれ語りて聞かするもあり、にくくしく、差配に行きて問ひ給へ。といふもあり。差配と聞えし男の、四十ばかりにて、かしらはげたるが、帳場格子やうなるものを控へて、算盤はじきあるうしろに、中元の禮にやもらひけん、さゝやかなる砂糖袋、さてはさうめんなどやうのものをひしと並べて、いと大風に物いふもにくし。

美倉橋と和泉橋とのあはひなる小路に、四疊半二疊二間なる家あり。店は三疊ばかりも板の間になりて、ここには壘もあり、建具もつきたり。長屋なれども、さまできたなからず敷金三圓、家賃一圓八十錢といふ。それもよし、これもよし。たゞ庭のいさゝかもなくして、裏は直ちに裏道の長屋の屋根に續きて、木立など夢にも見らるべきにあらず。うらみはこれと覺ゆるものから、なほ母君に見せまゐらせて、よしとならばよしにせん。といふ。邦子のし

下町 東京市の高臺でない方面をいふ。
 山の手 東京市の高臺方面をいふ。
 駒込 東京市本郷區。
 巢鴨 同豊島區。
 小石川 同小石川區。
 飯田橋 同牛込區と麹町區との境、神田川にかゝる。
 お茶の水通 飯田橋より神田川の北岸に沿うてお茶の水に行く通。
 お茶の水は神田區と本郷區との境、高臺をなし、神田川は谷をなしてゐる所。

きりに疲れて、道行きなやむもあはれなれば、今日はこれまでよとて歸る。まだ午前なりき。家に歸りて、なほさまゝに相談なす。「幾そ度思へども、下町に住まんことは嬉しからず。午後より更に山の手を尋ねばや。」といふ。庭のほしければなり。
 駒込・巢鴨・小石川邊は、いづれも土地がら靜かによき處なれど、何がしくれがしの別荘など多く、我がやうなるいやしき商ひしたりとて、買ふ人あるまじと覺ゆ。さては詮なし。牛込ならば神樂坂あたりこそと覺ゆれど、知る人近からも佗しく、かれこれ定まらずして歸る。

飯田橋よりお茶の水通を來れば、今日は川開とて、このわたりいひだに小舟浮べて、客を引くよ。かには馬車きしらせて急がすもあり。かちなるも、見事によ。そほひたてて、そのさま誇らしげなり。かへりみれば、邦子の疲れに疲れける足を引きて、しとゞ汗になり

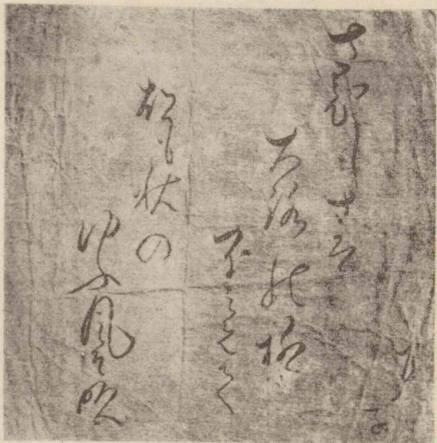
うき世めかしき遊

さひしきは大路の柳めにみえて、都も秋のゆふ風そ吹

心細しとはかかる時をこそ

坂本通 下谷區。上野公園から千住大橋に至る大通。

て従ひ來る。あはれこの人も不便なり。いとけなきに、父兄におくれて、うき世めかしき遊をも知らず、萬づはかなくて送るほどに、やう／＼うき世の變りものになりて、春の花ののどかなるをのみ見て、嬉しと思はぬほどになりぬ。さてや、これよりの境涯のあさましきを思へば、この人のためも、母のためも、悲しさは胸に満ちて、進むべき身も覺えず。さりとして退きて行く方もなし。心細しとはかゝる時をこそ。



一葉筆蹟

十七日 晴。家を下谷邊にたづぬ。邦子のしきりに疲れて、行くことをいなめば、母君と二人にてなり。坂本通にも二軒ばかり

龍泉寺町
下谷區。

見たれど、氣に入りけるもなし。行きくへて龍泉寺町と呼ぶ處に、
間口二軒、奥行六間ばかりなる家あり。左隣は酒屋なりければ、そ
こに行きて諸事を聞く。造作はなけれど、店は六疊にて、五疊と三
疊の座敷あり、向きも南と北にして、都合わるからず見ゆ。三圓の
敷金にて、月一圓五十錢といふに、いさゝかなれども庭もあり。そ
の家にはあらねど、裏に木立どものいと多かるもよし。さらば
邦子に語りて、三人ともによしとならば、ここに定めんとて、その
酒屋に頼みて歸る。邦子も異存なしといふより、夕かけてまた行
く。少し行きちがひありて、餘人の手に落ちん氣色なれば、さまざ
まに盡力す。

本郷の靜かな
る宿
本郷區菊坂町
の家。

二十日 薄曇。家は十時といふに引拂ひぬ。このほどのこと
すべて書きつくべくべきにあらず。もの深き本郷の靜かなる宿よ
り移りて、ここに始めて寝ぬる夜の心地、まだ生れ出でて覺えな

住むめり

あなづらる

千々に心は碎
けぬ

さる人

かりき。家は長屋建なれば、壁一重の隣には人力ひく男ども住む
めり。商ひを始めての後はいかならん、その者どももお客なれば、
機嫌にさからはじとつとむるにこそ。このあたりは人氣あしき
處と人々語り聞かせたるが、男氣なき家の、いかにあなづられて
くやしきことども多からん。何事もわれ一人はよし、母は老いた
り、邦子はいまだ世間を知らず、そが思ひわづらふ氣色を見るも
あはれなり。さて、商ひはいかにして始むべきなど千々に心は碎
けぬ。

蚊のいと多きところにて、藪蚊といふ大きなるが、夕暮よりう
なり出づる、おそろしきまでなり。この蚊なくならんほどは、縮入
着る時ぞ。と、さる人のいひしが、冬までかくてあらんこと佗し。

(一葉全集)

俳文 一 俳味 一 天の音楽

一九 天の音楽

小林一茶
通稱は彌太郎
江戸時代後期
の俳人、信濃
の人、文政十
年歿、年六十
五。

甘露を降らせ
一元康元年、
甘露、未央宮
に降り、大赦
甘露連降をも
つて、年を改
めて甘露とな
す。(漢書)
少女の降り
て云々



茶 一 林 小

正月元日の夜の丑の刻より始まりてうち續き八日目々々に天に音楽ありといふこと、誰いふともなくいひふらして、いつの夜しかと聞きしといふ人もあり。また吹く風のあとなし事とけなす者もあり。その噂、東西南北にばつと弘まりぬ。つらく思ふに、全くありと信じ難く、また、びたすらなしと片づけ難し。天地不思議のなせるわざにて、古へ甘露を降らせ、少女の天降りて舞ひしためしなきに

何にまれ

竹植うる日
陰曆五月十三日。この日、竹を植ゑれば、よく繁茂するといはれる。うきふし繁きうき世さと
時に二歳。文政二年。

しもあらず。今この天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優して樂しむならん。それを聞き得ざるは、その身の罪のほどによるべし。何にまれ、あしからぬ取沙汰なりと、三月十九日夕過ぎより誰かれ我が庵に集ひつゝ、おのゝ息をこらして待つうち、夜はしらゝ、明けて窓の梅の木に一聲あり。

今の世も鳥はほけ経鳴きにけり
二 子をさな子

こぞの夏、竹植うる日の頃、うきふし繁きうき世に生れたる娘ものにさとかれとて、名を「さと」とよぶ。ことし、誕生日祝ふ頃、ほより、てうち、あは、天窓てん、かぶり、振りながら、同じき子どもの風車といふものを持てるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるをやがてむしや、しやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにあ

おとせ

ひたむしりに
むしりぬ

心の皺を伸ば
しぬ

る茶碗をうち破りつゝ、それも直ちに倦みて障子の薄紙をめり
めりむしるに「よくした〜」。とほむれば、まことと思ひ、きやらさ
やらと笑ひて、ひたむしりにむしり
ぬ。心の中一點の塵もなく、名月のき
らきらしく清く見ゆれば、な
心の皺を伸ばしぬ。また、人の來りて、
「わん〜はどこに」といへば、犬に指
さし「かあ〜は」と問へば、鳥に指さ
すさま、口もとより爪先まで愛敬こ
ぼれて愛らしく、いはば春の初草に
胡蝶の戯るゝよりもやさしく覺ゆ。
をりから門に月さして、いと涼し
く、外にわらはべの踊の聲のすれば、直ちに小椀投げ捨て、片るざ



蔵土の茶一

二十五菩薩
阿彌陀佛の左
右に侍する。
憂さをなん晴
しける

母
菊女。
手かしこく

ほと〜忘れ
て

りにるざり出て、聲をあげ手眞似して、嬉しげなるを見るにつけ、
いつしか、かれをも振分髪のためになして、踊らせてみたらんに
は、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて興あるわざならん
と、我が身につもる老を忘れて、憂さをなん晴しける。
かくひねもすをじかの角の束の間も手足を動かさずといふ
ことなく、遊び疲るれば、朝は日のたくるまで眠る。そのうちば
かり母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃き片づけて、團扇ひら〜
汗をさまして、闇に泣聲のするを目の覺むる合圖と定め、手かし
こく抱き起して、乳房あてがへば、すは〜吸ひながら、胸板のあ
たりをうちたゝきて、にこ〜笑ひ顔をつくるに、母は長き胎内
の苦しきも、日々の襦袢の穢らはしきもほと〜忘れて、玉を得
たるやうに撫でさすりて、一入喜ぶなりけり。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな

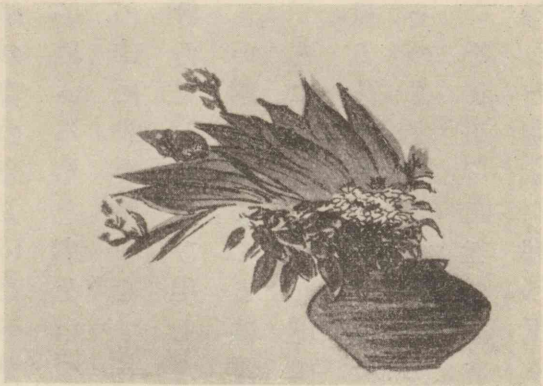
(おらが春)

吉村冬彦
本姓名は寺田
寅彦、物理學
者、理學博士、
東京市の人、
昭和十年歿、
年五十八。

二〇 小さな出来事

吉村冬彦

私の宅の庭は、割に背の高い四つ目垣で、東西の二つの部分に仕切られてゐる。この四つ目垣には、野生の白薔薇をからませてあるが、夏が来ると、これに一面に朝顔や花豆を這はせる。その上に自然に生える烏瓜もからんで、殆ど隙間のないくらゐにいろいろの葉が密生する。朝戸をあけると、赤紺水色柿色さまざまの朝顔が咲き揃つてゐるのは、可なり美しい。夕方が来ると、烏瓜の煙のやうな淡い花が茂みの中からのぞいてゐるのを蛾がせゝりに来る。薔薇の葉などは隠れて見えなく、くらゐであるが、垣根の頂上からは幾本となく勢のよい新芽を伸ばして、これが眼に見えるやうに日々生長する。これにまた朝顔や豆の蔓がからみついて、どこまでも空へくと競つてゐるやうに見える。



吉村冬彦 筆染

この盛んな勢で生長してゐる植物の葉の茂りの中に、枯れかかつたやうな薔薇の小枝から、煤けた色をした妙なものが一つぶらさがつてゐる。それは蜂の巣である。私が始めてこの蜂の巣を見つけたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顔や豆がやつと二葉の外の葉を出し始めた頃であつたやうに記憶してゐる。花の落ちた小枝を切つてゐるうちに氣がついて、よく見ると、大きさはやつと拇指の頭ぐらゐで、まだほんの造り始めのものであつた。これにしっかりと、黄色い強さうな蜂が一匹働いてゐた。

蜂を見つけると、私は中庭で遊んでゐる子供たちを呼んで、見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍しかつた。蜂の毒の恐しいことを學んだ大きい子等は、何も知らない幼い子にいろんな事をいつて、警めたり、おどしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶをさされ、山椒の葉をもんですりつけたことを思ひ出したりした。あの時分はアンモニア水を塗るといふやうなことは誰も知らなかつたのである。

とにかくこんな處に蜂の巢があつては危いから、落してしまはうと思つたが、蜂のゐない時の方が安全だと思つて、その日はそのままにしておいた。

それから四五日はまるで忘れてゐたが、或朝子供等の學校へ行つた留守に庭へ下りた何かのついでに、思ひ出してのぞいて見ると、蜂は前日と同じやうに、體を逆さまに巢の下側に取りついて仕事をしてゐた。二十くらゐもあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に繼ぎ足しをしてゐる最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへて、ぐる／＼と廻つて行くと、壁は二ミリメートルくらゐ長く延びて行つた。その新に延びた部分だけが際立つて生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しく違つてゐるのであつた。

一廻り壁が繼ぎ足されたと思ふと、蜂は更にしつかりと體の構へを直して、そろ／＼と自分の頭を今造つた穴の中へ挿し入れて行つた。いかにも用心深く徐々と體を曲げて、頭の見えなくなるまで押入れた。と思ふと間もなく引出した。穴の大きさを確かめて始めて安心したといふやうに見えた。そしてすぐに隣の管に取りかゝつた。

私は、この歳になるまで、蜂のこのやうな舉動を詳しく見たこ

好奇心に驅ら
れて

とがなかつたので、強い好奇心に驅られて見てゐるうちに、この小さな昆蟲の巧妙な仕事を無慙に破壊しようといふ氣にはどうしてもなれなくなつてしまつた。

それから時は時々、庭へ下りるたびにわざ／＼のぞいて見たが、蜂のゐない時はむしろ稀であつた。見るたびに六稜柱の壁はだんだんに延びて行くやうであつた。

或時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めてゐることが眼についた。そして壁を延ばす代りに穴の中へ頭を挿しこんで、内部の仕事をやつてゐることもあつた。しかしそれがどういふ目的で何をしてゐるのだから自分にはわからなかつた。

そのうちに私は何かの仕事にまぎれて、暫く蜂のことは忘れてゐた。多分半月ほど経つてからと思ふが、或日ふと思ひ出してのぞいて見ると、蜂は見えなかつた。のみならず巢の工事は前に

見た時と比べて、ちつとも進んでゐないやうであつた。何だか豫想がはづれたといふだけでなしに、一種の——ごく軽い淋しさといつたやうな心持を感じた。

それから後は、いつまで経つても、もう蜂の姿は再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと、いろ／＼なことを想像してみた。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたのかとも考へてみた。しかしまたこの蜂が今現にどこか遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んでゐるやうな氣もした。

私は親しい友だちなどが死んだ後に、獨りて街の中を歩いてゐると、ふとその友が現に同じ東京のどこかの町を歩いてゐる姿をあり／＼想像して、いひ知れぬ淋しさを感じることもあるが、この蜂の場合にもこれとよく似た幻を頭に描いた。そして強

幻を頭に描い
た

いまぶしい日光の中にきら／＼して飛んでゐる蜂の幻影が、妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

或日何かの話のついでに或友人にこの話をしたら、友人は私とはまるで違つた解釋をした。蜂は場所が悪いから斷念して外へ移轉したのだらうといふのである。さういへば、或はさうかも知れない。實際兩側に廣い空地を控へたこの垣根は、嵐が吹き通したり、雨に洗はれたり、人の接近することが頻繁であつたりするので、蜂にとつては、あまり都合のいい場所ではない。しかし果して蜂がその本能、或は智慧で判斷して、一旦選定した場所を、作業の途中で中止して他所へ移轉するといふやうなことがあるものか、ないものか、これは専門の學者にでも聞いてみなければわからないことである。

もし友人の判斷が本當であつたとしたら、つまり私は自分の

安直な感傷的
の情緒

事務的に破つ
てしまつた

想像の中で強ひて憐な蜂を殺してしまつて、その死を題目にした小さな詩によつて、安直な感傷的の情緒を味はつてゐたことになるかも知れない。しかしいづれにしても私は私の幻想を無造作に事務的に破つてしまつた友人に對して、軽い不平を抱かないではゐられなかつた。

今日のぞいて見ると、蜂の巢のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、その上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくたまつてゐる。蜂の巢といひながら、やはり住む人がなくて荒れはてた廢屋のやうな氣がする。この巢のすぐ向側に眞紅のカンナの花が咲き亂れてゐるのが、一層蜂の巢をみじめなものに見せるやうであつた。私はともかくもこの巢を來年の夏までこのまゝそつとしておかうと思つてゐる。來年になつたら、この古い巢に、もしや何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。

(冬彦集)

岩城準太郎

國文學者、奈良女子高等師範學校教授、富山縣の人、明治十一年生。

徒然草

吉野朝時代の歌僧吉田兼好の隨筆。

肺肝を吐露する

矯飾と辭令とを剥ぎ去つた赤裸の國民

二 國學者の業績

徒然草 兼好の隨筆

岩城準太郎

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそ、こよなり慰むわざなれ。」とは徒然草の名文句であるが、人間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは即ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるのみでない。相互に他の文章を讀むことによる。矯飾と辭令とを剥ぎ去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民が、その祖先と相面接する思をするのは、過去の國民の書き残した文學を讀む時である。父祖の遺文に接する時の

我が血脈の生相繋がる宿縁
面影を髣髴し
ようとする

古代の鏡

懐かしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古太古の國民の、その時代々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繋がる宿縁を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したもの、に當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き／＼と今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに隨つて遺文遺作が亡びる。時代の古きに隨つて文筆の人が少い。歴史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルム

風雨千歳の淘汰を経て

いぢり

學問のための學問

如上の

である。これを書き残した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究は、たゞに古物いぢりの物好きでもないのみならず、學問のための學問といふやうなものでもない。實に我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味に於て、自分は古典に對して限りない敬愛を捧げ、探究の念を起すのである。この點に着目し、かくの如き見解から、古典の研究を開始したものは、即ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、隨つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者、國語學者にも、國史學者、古典學

敬神學祖

闡明する

元亨釋書

我が國各時代の僧の傳を記したもので、僧師録の著、それは意味が違ふ

「元亨釋書」の時代に於ては、單に我が國の學問の意で、それ以上の深い意味はなかつたのである。

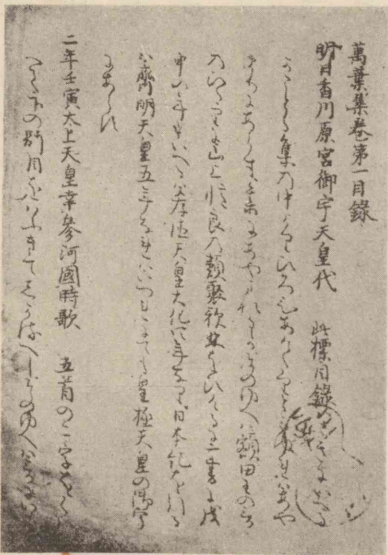
者にも、神道家、皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。しかしここで國學者といふのは、國文學の作家でもなく、國語の研究家でもなく、歴史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて、固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉の最も古くあらはれてゐるのは、吉野朝の書「元亨釋書」であるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に國民としての自覺が生じた後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、ここに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛教の道理を説くので、ここに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起は、この要求と關係はあるが、近

その體裁をなして來た

慶長 第七代後陽成天皇の御代。

荷田春滿 本姓は羽倉、江戸時代中期の國學者、元文元年歿、年六十八。

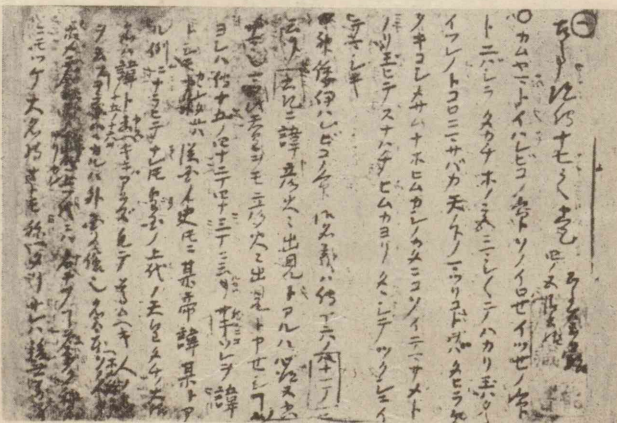


(筆沖契) 稿草の記匠代集葉萬

古時代の神道は、研究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出来て來るのを待たねばならなかつた。近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも、佛學にも、學者と名づくべき者が出て來た。特に漢學の勢が盛んであつた。慶長年間、漢學興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現れた。國學者なるものが出たのはそれからである。國學の言葉を新しい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ひたのである。なほ啓文の中に皇國之學ともいひ、國家之學ともいつて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國學校と出してあるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認め

伏見稻荷 今、京都市伏見區深草に鎮座する官幣大社稻荷神社。祭神は倉稻魂神・猿田彦神・大宮女命。享保 第十代中御門天皇の御代、徳川八代將軍吉宗の世。

てよろしい。この意味での國學者は、萬治寛文頃から追々現れて、近く明治時代に及んでゐる。僧契沖荷田春滿賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤等は、そ



(筆長宣) 稿草の傳記事古

暗がりの中に
放置せられて
ゐた

祖先の心胸に
觸れる

啓蒙的

餘澤に浴して
ゐる
遠い祖先への
面接に急ぐ

の最も傑出した人物である。

これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に
放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我が懐かしい同胞
國民の面影を、まのあたり見るが如く感ずることが出来るやう
になつた。今まではせつかく貴重な古典をもつてゐながら、言語
解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出来な
かつたが、これ等學者は、まづ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を
解釋し、史籍物語等古典の全部にわたつて啓蒙的研鑽に力めた
ので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られな
い。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接
に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しないでは
ゐられない。

(國文學の諸相)

九郎御曹司

源經

浮島が原

今の静岡縣吉

原野の東方の

兵衛佐

源賴朝

佐殿

兵衛佐殿の略

狡死走狗

飛鳥

尋常なるが

五五
左

二二 浮島が原

九郎御曹司浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前三町ばかり
引退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿これを御覽
じて、「ここに白旗白じるしにて、清げなる武者五六十騎ばかり見
えたるは、誰なるらん、おぼつかなし。いかなる人ぞ、假名實名を尋
ねて參れ。」とて、堀彌太郎を御使にて遣はさる。家子郎等數多引具
して參る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、「ここに白
じるしにておはしまし候は、誰人にてわたらせ給ひ候ぞ。假名實
名を確かに承り候へと、鎌倉殿の仰せにて候。」と申しければ、その
中に二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直
垂に紫裾濃の鎧の裾金物打ちたるを、着、白星の五枚兜に、鉞形打
ちて猪頸に、着、大中黒の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞

見參に入れて
たび候へ

佐藤三郎
名は繼信。

善惡に騒がぬ
人

義經記
本朝此の...
長良...
下野...
女七...

本寫古記經義

しきに乗りたるが歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿も知ろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うてゐ候ひつるが、御旗揚の由承り、夜を日につぎて馳せ參じて候。見參に入れてたび候へ。と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてましましけりと、馬より飛んで下り、御曹司の傳子佐藤三郎を呼び出して色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を曳かせけり。かくて佐殿の御前に參り、この由を申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、このたびは殊の外嬉しげにて、さらばこれへおはしまし候へ、見參せん。と宣へば、彌太郎

やがて

佐藤四郎

名は忠信。

信の弟。

伊勢三郎

名は義盛。

八箇國

武藏・相模

上總・下總

安房・常陸

上野・下野

聲を呑みて泣

心ゆくほど

頭殿

頼朝や義經の父である左馬頭義朝。頭殿は左馬頭殿の略。

池の尼

平忠盛の後室で、清盛の繼母。

伊豆の配所

今の静岡縣田方郡誰山村の内、蛭が島。

やがて參り、御曹司にこの由を申す。

御曹司、大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐藤三郎、同四郎、伊勢三郎、これ等三騎召しつれてぞ參らる。佐殿御陣と申すは、大幕百八十町ひきたりければ、そのうちは八箇國の大名小名並みありたり。各敷皮にてぞありける。佐殿、御座敷には疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司、兜を脱ぎて童に持たせ、弓取りなほし、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ直られける。それへくとぞ仰せらる。御曹司暫く辭退して、敷皮にぞ直られける。佐殿つくくと御覽じて、まづ涙に咽せび給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。互に心ゆくほど泣きて後、佐殿、涙を抑へて、さて頭殿におくれ奉りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼に宥められしによりて、伊豆の配所に

いかゞ仰せに
従ひまゐらせ
では候べき

君を見奉り候へば、故頭殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。身をば君にまゐらする上は、いかゞ仰せに従ひまゐらせては候べき。と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

(義經記)

二三 敦盛最期

さるほどに一の谷の軍破れければ、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ち行き給ふらん、あつばれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて渚の方へ歩まするところに、ここに練貫に鶴繻うたる直垂に、萌葱匂の鎧着て、鉄形打つたる兜の緒をしめ、黄金作の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたる武者一騎沖なる船に、目をかけて、海へさ

さるほどに
一の谷
今の神戸市須
磨の西方。

水際
波打際

まさなうも

つとうち入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。

熊谷、あれはいかによき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。まさなるも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ、返させ給へ。と扇



返させ給へ

をあげて招きければ、招かれて取つて返し、汀にうちあがらんとし給ふところに、熊谷、波打際にておし並べ、むずと組んで、どうと落ち、取つて押へて、首を搔かんとて、兜をおしあふのけ

て見たりければ、薄化粧して、鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほとして、十六七ばかんなるが、容顔まことに美麗なり。そもく、いかなる人にてわたらせ給ひ候やらん。名のらせ給へ。助けまゐら

むずと

小次郎
名は直家。
そもく

城
一の谷の城。

包まんとしければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰に差されたる。あないとほし、この曉城の内にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけるぞや。當時御方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけり。とて、これを大將軍九郎御曹司の見參に入れたりければ、見る人皆涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子大夫敦盛とて、生年十七歳にぞなられけるとぞ聞えし。それよりしてこそ、熊谷が發心の思はいよゝゝ進みけれ。

笛の器量
讚佛乘の因
佛の妙理を
讚歎する因縁を

件の笛は祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し賜はられたりしが、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語の理といひながら、遂に讚佛乘の因となるこそあはれなれ。(平家物語)

杉村楚人冠

名は廣太郎、
評論家、和歌
山市の人、明
治五年生。

二四 車中の面識

杉村楚人冠

毎日々々同じ汽車、同じ電車に乗合はせて、顔はよく見覺えてゐる。恐らく先方でもこちらの顔は見覺えてゐるに相違ない。それでゐて、お互に挨拶もしなければ口も利かない。——かういふ關係の人がよくある。

二三度逢つた時分に、氣輕に目禮でもするか、にたりとして見せるか、不時に停車でもした時、獨語のやうに小言をいつた尻へ、相手がついて來てくれるかすれば、これから二人の隔てがとれて、追々に知合ひになつてしまふものだが、ついそんな機會に出あはぬか、出あつてもその機會を捉へそこなふかすれば、雙方で變に出そゝく来て、何年経つても睨みあふだけで、それ以上には進まない。

顔を見合はせてゐることが長く續けば續くほど、ますます近づきにくくなる。をりふし隣同士に坐り合はせることでもあると、口を利くには最も都合のいいをりだとは思ひながらも、何やら堅くなつて、わざとつんとすまして、知らぬ振を試してみたいやうな氣になる。

そのうち先方の友人が乗合はせて、何やら語りあつてゐることがある。こちらでも知つた者と一緒になつて話をすることがある。この話の様子で、先方がどこに勤めてゐる人か、何をしてゐる人か、だん／＼わかつて来る。向ふでもこちらがどんな事をしてゐるどんな人かは、追々にわかつて行つてゐるのだらう。かう互に素性がわかりかけて來ると、いよ／＼ますます／＼兩人の間の障壁は取れにくくなつて、口を利くなら、そちらから利きに來いといふやうな意地が出る。

兩人の間の障壁

己れを辱める

相手が相當聞えた人であつて、かねて名前ぐらゐ聞いてゐた人だと、なほ以ていけない。今更口を利くのが、どうしてもみづから己れを辱めるやうな氣がする。たま／＼私と先方と雙方を知つてゐる人が、をりよく乗合はせて、その人が私にも話せば、相手にも話しかけるやうなことがあると、その人に一度紹介しても、らひさへすれば、それから先はする／＼と二人の交際が進んで行くべきはずと、萬々承知してゐながら、さて何といふことなしに紹介してもらふ氣にはなれない。

萬々

どうかした拍子に、かういふ人と、いつもの汽車や電車の中でもない、飛んでもない別の所でばつたり行きあふことがある。その時のきまりの悪さといふものは一通りでない。こんな時にこそ、あつさりと目禮でもしておけば、それが縁になつて、つきあひの始まるものだが、何分にも物の出端でといふものは變なぐあひの

物の出端

もので、さう口でいふやうに、あつさりとは行かない。二人はわざと見て見ぬ振か何かで行き過ぎてしまふ。

かうして二人の關係が風引のやうにだん／＼こじれて行くと、しまひには何となく相手が面憎くなる。いやに取りすましてゐる、口を利いたつていいぢやないかといふやうな氣になる。何だか高慢ちきな目つきをして人を見下げてゐる、もつと笑顔でも見せるがいいぢやないかといふやうな氣になる。そつちが口を利かないなら、こつちだつて利いてやるものか、後になつて折れて來たつて、相手にはしてやらんぞといふやうな氣になる。――多分私が思つてゐる通りのことを、先方でも思つてゐるに相違ない。

人と人との關係が、國と國、村と村、町と町、學校と學校、會社と會社との間にもある。どちらか一方が氣輕にあつさりと出さへす

れば、あんな重苦しい、おつかぶさつたやうな心持を永い間してゐなくともすむ。雙方が相手のあつさりと出て來るのを待つてゐるのだ。兩方で待つてゐるから、はてしがつかない。(湖畔吟)

日本女子讀本 卷五終

Handwritten signatures and initials: 梶田都, 梶田都, l o o b b, l o o b b, b

野本製

昭和七年六月二十四日印刷
昭和八年七月二十四日印刷
昭和十一年七月三十一日印刷
昭和十一年十二月三日印刷
昭和十一年十二月三日改訂第二版印刷
昭和十一年十二月三日改訂第二版印刷

日本女子讀本 第三版訂卷五

定價 金五十六錢

編者 高木武

發行者兼 東京市神田區神保町一丁目三番地 富山房

代表者 會社 坂本嘉治馬

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社



發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地

會社

富山房

電話神田二、一七一—二、一七八番
振替貯金口座東京五〇一番

縣立松永

稲田都

M. Inada

